長崎県文化財調査報告書 第152集

稗田原遺跡 Ⅲ

1999年

長崎県教育委員会

長崎県文化財調査報告書 第152集

稗田原遺跡 Ⅲ

1999年

長崎県教育委員会

調査区遠景

旧　河　道

発刊にあたって

稗田原遺跡は，島原市の北側に位置する稗田町にあります。付近は，畑中遺跡や礫石原遺跡など縄文時代の大きな遺跡が点在する，古くから歴史に縁の深い場所であります。

今回の調査は，県道の拡幅工事に先立って行われたものですが，旧河道が確認され，土石流の跡もみつかりました。この土石流の堆積層からは、奈良時代の土器が多く出土し、中には文字が記されたものもありました。このことから，付近には奈良時代に何らかの施設や集落があり，土石流による被害を受けていたことが推測されます。今日でも記憶に新しい普賢岳の噴火に伴う災害が，歴史的にも繰り返されてきたことが改めて実感されます。

このような発見は，単に考古学上の成果にとどまらず，自然災害と向きあう人類の教訓として貴重であると思われます。体験学習の重要性が説かれる今日，こうした過去の体験の記録が活用され，あわせて文化財保護の一助となることを念願し，発刊の御挨拶といたします。

平成11年３月

長崎県教育委員会教育長

出口　啓二郎

例　　言

1．本書は，一般県道野田島原線道路改良工事に伴って実施した，長崎県島原市稗田町に所在する稗田原遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．調査は，長崎県教育委員会が主体となり，長崎県教育庁文化課がこれを担当した。

3．調査関係者と調査期日は，以下のとおりである。

試掘調査（平成９年５月13日～平成９年12月５日）

長崎県教育庁文化課　文化財保護主事　村川　逸朗

同　　宇土　靖之

本調査（平成10年５月13日～平成10年７月10日）

長崎県教育庁文化課　文化財保護主事　川口　洋平

同　　宇土　靖之

文化財調査員　　尾上　博一

4．本書の執筆担当は，以下のとおりである。

Ⅰ．	尾上博一
Ⅱ．	宇土靖之
Ⅲ－１．	宇土靖之
Ⅲ－２．(1)(2)(3)	尾上博一
Ⅲ－２．(4)①	福田一志
Ⅲ－２．(4)②	渡邉康行
Ⅲ－２．(4)③④	川口洋平
Ⅳ．	川口洋平

5．グリッド配置図の数値は国土調査法第Ⅰ座標系で示した。本書で用いた方位は磁北である。

6．遺物の実測は，網谷泰代・川村由美子・森崎京子，トレースは，近藤千鶴・斉藤いづみ・渡辺洋子がおこなった。

7．遺物の写真撮影に際しては，中村幸の協力を得て、川口・宇土がおこなった。

8．遺物および土層の色調は，小山正忠・竹原秀雄 1967『新版　標準土色帖』日本色研事業株式会社による。

9．本書の編集は，川口・宇土による。

本 文 目 次

Ⅰ　遺跡の地理的歴史的環境 …… (1)
Ⅱ　調査に至る経緯 …… (3)
Ⅲ　調　　査 …… (4)
　1．試掘調査 …… (4)
　2．本 調 査 …… (7)
　(1) 調査方法 …… (7)
　(2) 土　　層 …… (7)
　(3) 遺　　構 …… (13)
　(4) 遺　　物 …… (20)
Ⅳ　ま と め …… (36)
図　　版 …… (37)

挿 図 目 次

第１図　遺跡位置図 …… (2)
第２図　県道拡幅範囲図 …… (3)
第３図　試掘坑配置図 …… (5)
第４図　試掘坑土層図 …… (6)
第５図　グリッド配置図 …… (9)
第６図　本調査土層図① …… (11)
第７図　本調査土層図② …… (12)
第８図　遺構配置図 …… (15)
第９図　306・95号土坑実測図 …… (19)
第10図　旧石器時代の遺物 …… (20)
第11図　縄文時代の土器 …… (20)
第12図　縄文時代の石器① …… (21)
第13図　縄文時代の石器② …… (22)
第14図　縄文時代の石器③ …… (23)
第15図　旧河道出土の遺物① …… (27)
第16図　旧河道出土の遺物② …… (28)
第17図　層位出土の遺物［古代］① …… (29)
第18図　層位出土の遺物［古代］② …… (30)

第19図　層位出土の遺物［中世］①　……　(31)
第20図　層位出土の遺物［中世］②　……　(32)

表　目　次

表１　稗田原遺跡遺構一覧表　……　(14)
表２　遺物データ　……　(34)

図　版　目　次

図版１　調査区遠景・作業風景・実測風景　……　(39)
図版２　ＣＤ２区・Ｂ６区・Ｂ７区　……　(40)
図版３　ＡＢ12区・ＡＢ12区・ＡＢ12区　……　(41)
図版４　Ｂ16区・ＡＢ18区・ＡＢ18区　……　(42)
図版５　ＡＢ14～19区・ＡＢ16～17区・ＡＢ７区　……　(43)
図版６　Ａ11区・ＡＢ13区・ＡＢ13区　……　(44)
図版７　Ｂ８区・ＡＢ14区　……　(45)
図版８　ＡＢ14区・ＡＢ16区・ＡＢ18区　……　(46)
図版９　ＡＢ18区・ＡＢ18区・Ｂ19区　……　(47)
図版10　遺物１・７・13・15　……　(48)
図版11　遺物17・21・22・23　……　(49)
図版12　遺物24・27・28・29　……　(50)
図版13　遺物30・68・69　……　(51)
図版14　遺物70・71・72・73　……　(52)
図版15　石器１・石器２　……　(53)
図版16　石器３　……　(54)
図版17　陶器・刻書土器　……　(55)
図版18　輸入陶磁器　……　(56)
図版19　国産陶器　……　(57)
図版20　中世須恵器　……　(58)

Ⅰ　遺跡の地理的歴史的環境

稗田原遺跡は，長崎県南東端で胃袋状を呈する島原半島の北東部にあり，もと三会木崎名内の島原市稗田町に所在する。半島は愛野地峡で肥前半島に繋がり，東西約17km，南北約31km，面積約463km²である。地質・地形的には北部の雲仙火山地域と南部の南島原火山地域に大別でき，小浜町飛子から北有馬町の原山，有馬川河口の谷川に至る線が境界となる。雲仙火山は大分県姫島・九重，長崎県多良岳，対岸の熊本県金峰山とともに属する大山火山帯の一部で，九州中部を東北東から西南西に横断する別府，島原地溝帯の西端に位置する。その面積は半島全体の約70％を占める。

この雲仙火山地域は半島のほぼ中央に位置する普賢岳を主峰とし，東の眉山，西の国見岳，九千部岳，北の吾妻岳，鉢巻山などにより構成される。主峰普賢岳の溶岩は粘性に富む角閃石安山岩である。遺跡の立地する同山系北東麓に伸びた火山性扇状台地は，基盤を雲仙基底火山砕屑層または竜石層と呼ばれる火山砕屑物で厚くおおわれており，緩やかに勾配して遺跡から約600m東の有明海に没している。また周辺は，舞岳・普賢岳・眉山を水源とする河川群が狭小な沖積低地を構成している。

遺跡は礫石原山麓地の末端南方で西川と中尾川により開析される沖積低地上にあり，本調査区は東西約675m，南北400mの遺跡範囲中，中央部南東寄り標高27～30mに位置する。北を東流する西川周辺には眉山の裾野にかけて縄文時代の遺跡が多く存在している。

今回の調査では約4000年前に比定される六ツ木火砕流と８～９世紀の古代に発生したと考えられる土石流が確認された。このほかにも普賢火山の活動を示す記録が二つ残されている。

一つは明暦三年・1657年（異説では寛文三年・1663年）に起きた，普賢岳北東方700mの鳩の穴からの噴火で，大量の古焼溶岩が北方の山麓に流出した。翌四年には九十九島池から火山活動に伴う温泉水の大量噴出があり，この出水により家屋流出と死者を出す惨事を引き起こしたという。また同時期に三会村の礫石原でも出水があったとされている。

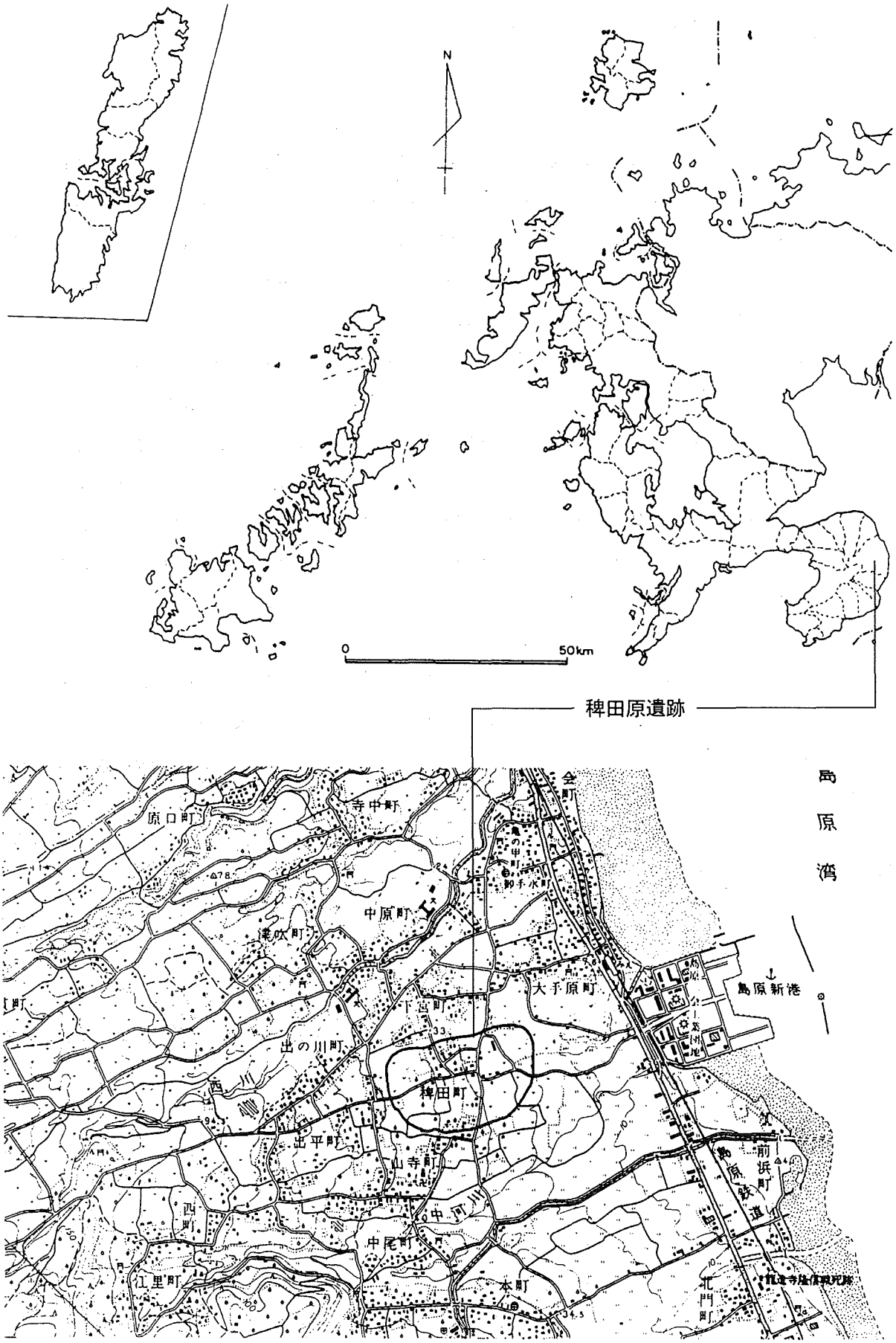
いま一つは寛政四年・1792年の噴火で，普賢岳北東方約１ｋｍの飯洞岩の北方の地獄跡から新焼溶岩流が噴出し，穴追谷をおよそ３km流下した。この噴火に前後して眉山が崩壊をおこし，高度は150mも低くなり，海岸線は埋没のため800m前進している。対岸の熊本県にも被害が及ぶ災害となり，島原大変肥後迷惑として伝えられる。島原市の豊富で澄んだ水は眉山崩壊の堆積物から伏流水としてわき出したものである。

〔参考文献〕

長崎県編1984「雲仙火山　地形・地質と火山現象」『雲仙の自然と歴史』（国立公園「雲仙」指定50周年記念）

倉沢　一1992「第４章火山　３大山火山帯（４）雲仙火山」『日本の地質９　九州地方』共立出版株式会社

太田一也・小林哲夫・露木利貞1992「第６章応用地質　３災害地質（４）噴火災害」『日本の地質９　九州地方』共立出版株式会社


N
0
50km
稗田原遺跡
島原湾
島原新港
原口町
寺中町
中原町
津吹町
大手原町
下宮町
出の川町
稗田町
出平町
山寺町
中尾町
本町
西町
江里町
北門町
前浜町
島原鉄道

第１図　遺跡位置図

Ⅱ　調査に至る経緯

島原半島北部から島原市へつなぐ主要道として，海岸沿いの国道251号線と山間部の愛野島原線，その間を走る通称「雲仙グリーンロード」「中間道路」等と呼ばれる広域農道が存在する。

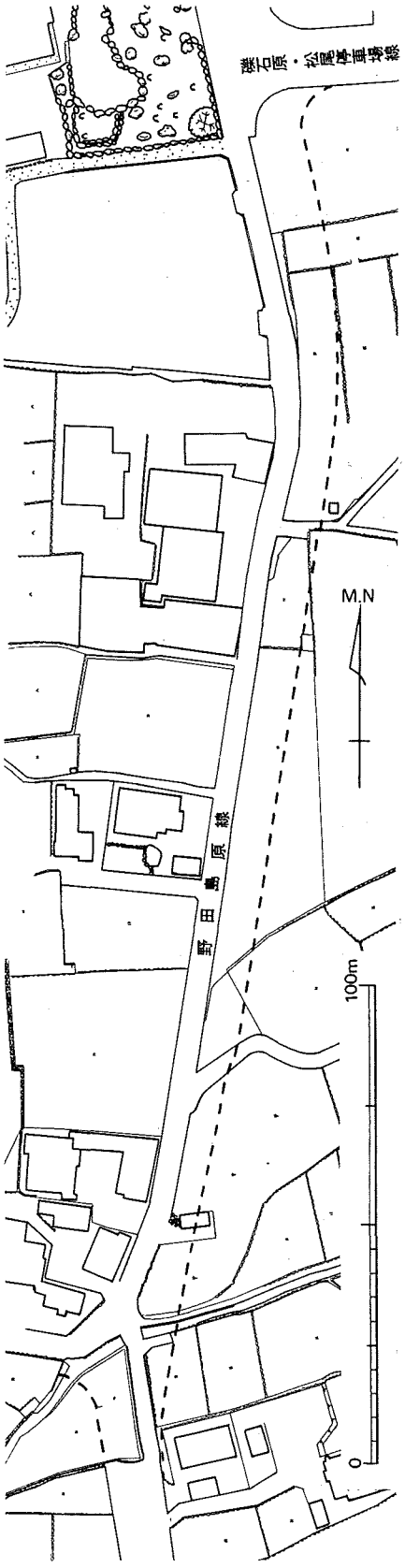
このうち近年開通した広域農道は三会地区までしか開発されておらず，以降市街地までは251号線もしくは離合困難な隘路を通る必要があり，また251号線の新港―北門間は通勤・帰宅の時間帯には渋滞が発生，農道からの合流によりさらに拍車がかかる。

この道路事情改善のため，広域農道と直交する礫石原・松尾停車場線道路，さらにそれと直交する野田島原線道路の改良拡幅工事を行い，それまで一車線だった両路線を二車線とし広域農道から島原市本町を結ぶ事業が島原振興局により計画され，両路線とも稗田原遺跡の範囲内を通るため，島原振興局と協議を行い発掘調査を行うこととなった。

稗田原遺跡は，昭和56年の分布調査により周知され，礫石原・松尾停車場線については平成４年から９年にかけて長崎県教育委員会により断続的に発掘調査が行われ，須恵器やヘラ描き文字を有する土師器等が出土している。また，改良拡幅工事も一部を除いてほぼ終了している。

今回の調査は，島原振興局による野田島原線道路改良工事に伴い，礫石原・松尾停車場線との接続部分から南に約300メートルの拡幅範囲において，平成９年12月に用地買収のすんだ約190メートルの区間で県文化課が試掘調査を行い，その結果拡幅範囲のほぼ全域，1,340㎡を調査することとなった。

路線途中の中尾川に架かる橋梁がすでに完成しているため工事の着工が急がれる。



第２図　県道拡副範囲図（S＝1／1,500）

Ⅲ 調 査

1 試掘

（1）調査

調査は，平成９年12月１日から12月５日までの５日間，道路拡幅に係る範囲の礫石原・松尾停車場線との接続部から農業用水路までの区間を対象に２ｍ×２ｍの試掘坑を６箇所（ＴＰ１～ＴＰ６）設定して，長崎県教育庁文化課村川・宇土が行った。調査範囲はすべて田畑であり，調査当時はＴＰ６より南は白菜の栽培中であったが，収穫を一部早めてもらいＴＰ３・ＴＰ４を設定した。またＴＰ４から農業用水路の間は用地買収の都合で試掘坑が設定できず，そこに予定していたＴＰ５・ＴＰ６は比較的遺物の出土が少なかったＴＰ２の南北に設定した。

（2）遺物

全体的に須恵器・土師器の細片が出土している。ＴＰ４からは多量に出土し，ＴＰ１から縄文後期初頭の土器片・石鏃が出土した。

（3）遺構

確認できなかった。

（4）土層

ＴＰ１

１層：耕作土
２層：黒茶色土層
３層：黄色土層（アカホヤ）遺物包含
４層：黒色土層　遺物包含
５層：黒色土層（白い斑点あり，ガチガチに硬い）

ＴＰ２

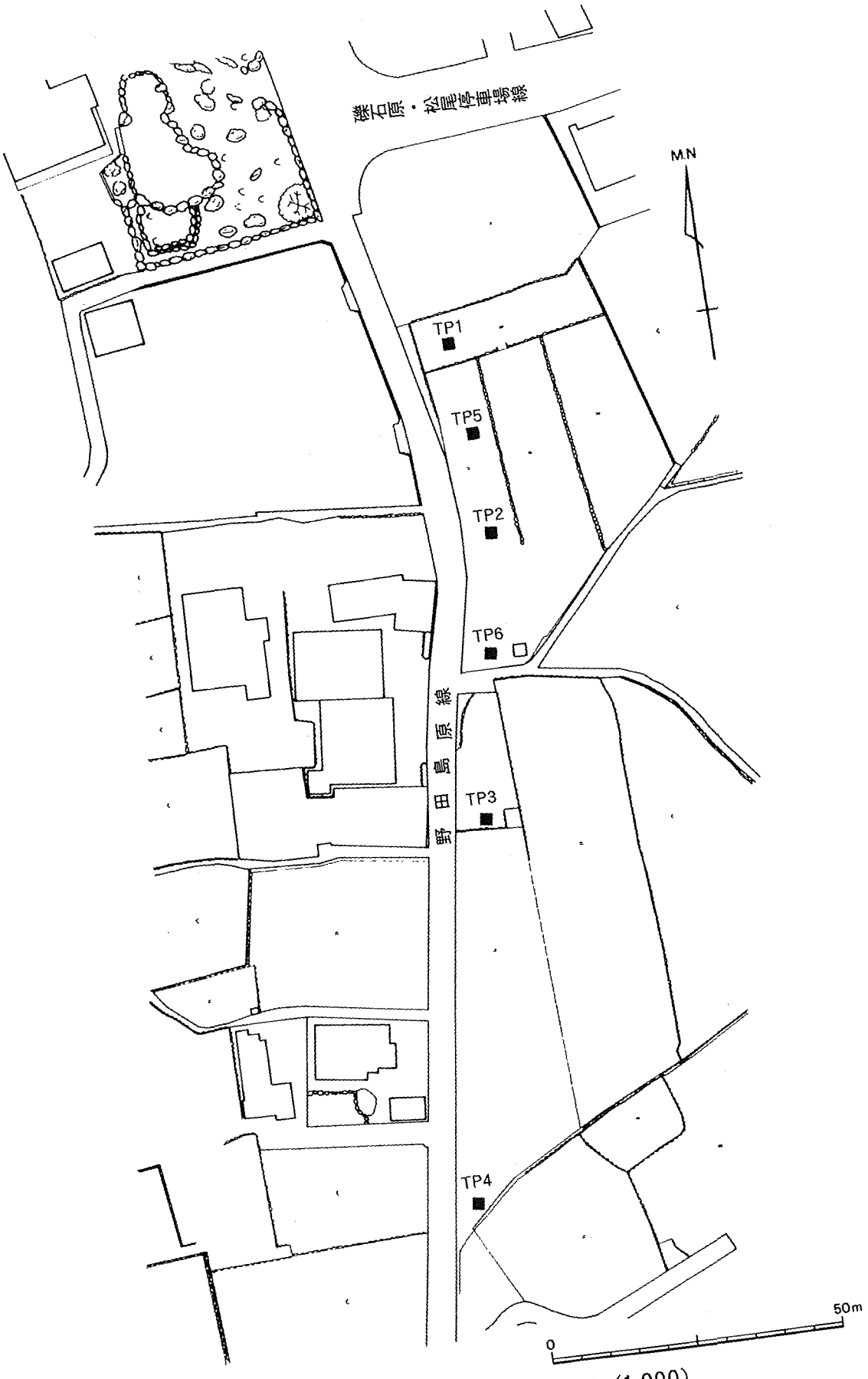
１層：耕作土
２層：茶黒色土層　遺物包含
３層：黒茶色土層　遺物包含
４層：暗赤褐色土層（ガチガチに硬い）
５層：灰色砂層　（火砕流）

ＴＰ３

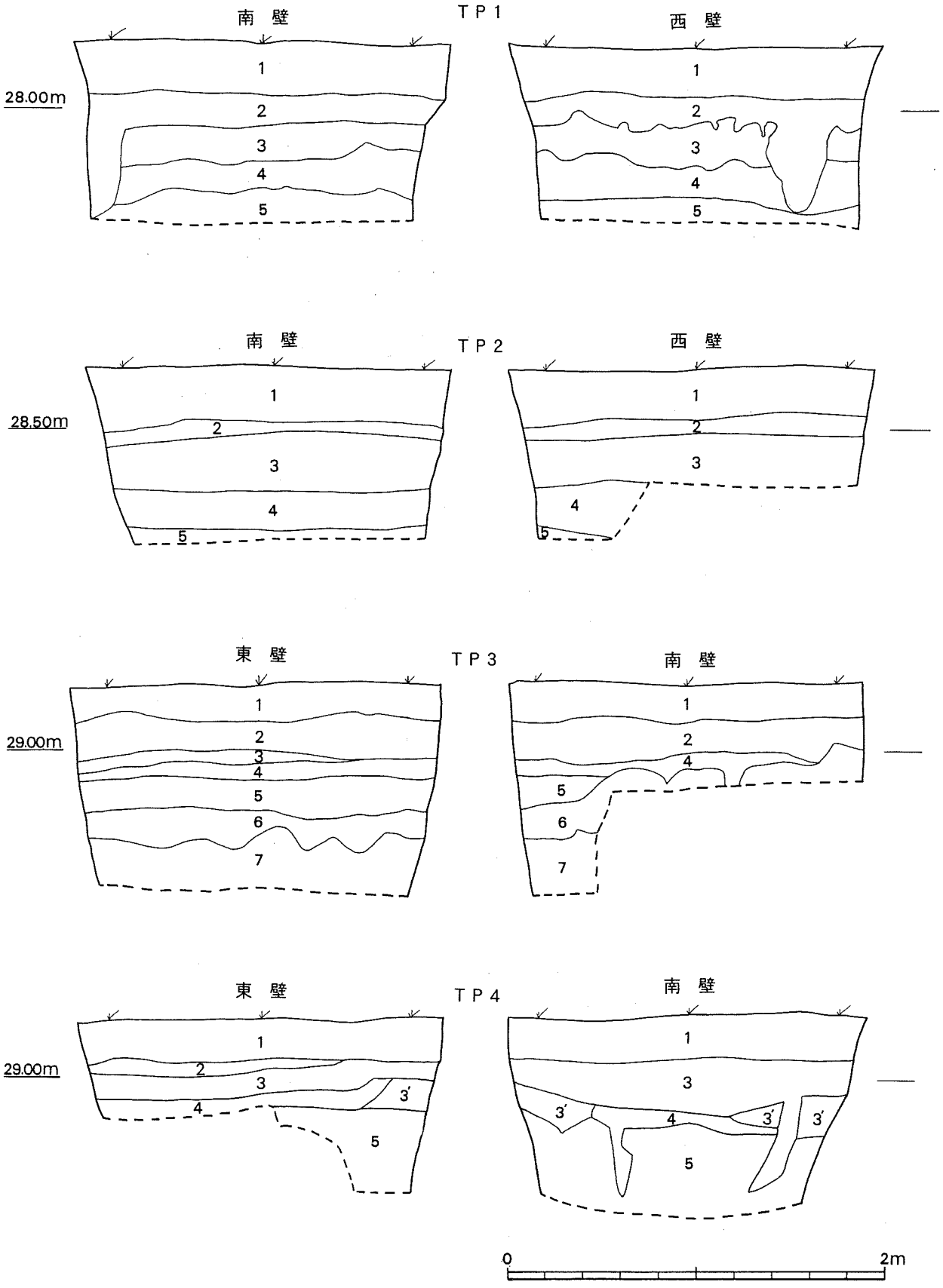
１層：耕作土
２層：黒色土層
３層：茶黒色土層　遺物包含
４層：黒色土層　遺物包含
５層：灰色砂層
６層：黄褐色土層
７層：黒色土層

ＴＰ４

１層：耕作土
２層：茶黒色砂質土層　遺物包含
３層：黒色砂質土層　（小石を多く含む）遺物包含
３'層：黒色砂層
４層：黄色土層
５層：灰黒色土層（白い斑点を含む，ガチガチに硬い）



第3図　試掘拡配置図（S＝1／1,000）



第4図　試掘坑土層図（S＝1／30）

2．本調査

（1）調査方法

調査区は県道礫石原松尾停車場線との交差点から南へ約190ｍの県道野田島原線に沿った，幅約８ｍの範囲である。平成５年に実施された礫石原松尾停車場線拡幅に伴う緊急発掘の１～３次調査区に連続する。周辺地は普段畑として農作物栽培に用いられ，夏には水を張って水田として稲作がおこなわれている。調査区も調査前は畑として人参等の野菜が栽培されていた。さらに南側の中河川の支流付近は蜜柑畑になっている。調査にあたり全体に10ｍ×10ｍのグリッドを設定し，北東隅を起点として，西にＡ～Ｄ，南に１～20の記号・番号をつけた。

調査はⅠ～Ⅱ層までの表土を重機を用いて除去し，Ⅲ層以下各層を人力で掘り下げ，遺構・遺物の検出につとめた。掘り下げるにあたって，隣接するグリッドの東西方向の境界線のみを南北に30cmずつ計60cm幅で層序確認用にベルトを設定し，各グリッド単位で作業をおこなった。

遺物は遺構内検出分は番号をつけて個別に取り上げ，それ以外はグリッドごとに包含層一括として取り上げた。

調査は作業人員数による制限と行程の関係上，11区を境に南北で時期を分けて実施した。都合上，調査区南半は11・12区を排土置き場にして作業を進め，様子を見て大型車で運び出す手順をとった。また北半部はＢＣ４区東を排土置き場とした。

（2）土層

今回の調査では，調査区西方を走る県道の基礎工事の影響がない各グリッドの北・東・南壁で層序の確認をおこなった。また層の保存が良いＡＢ13区で，南壁に沿って幅120cmにトレンチを設定し，遺跡の基本層序の把握につとめた。この結果，以下のⅠ～Ⅹ層に分類できた。層は色，質，包含物により，火砕流・土石流の堆積層では特に顕著に細分が可能である。

Ⅰ層：表土，Ⅱ層：耕作土，Ⅲ層：客土，Ⅳ層：整地層，Ⅴ層：土石流堆積層，Ⅵ層：土石流堆積層，Ⅶ層：六ツ木火砕流堆積層，Ⅷ層：アカホヤ，Ⅸ層：Ⅷ・Ⅹ層漸移層，Ⅹ層：カシノミ層。

平成５年10月28日～12月２日におこなわれた一般県道礫石原松尾停車場線拡幅に伴う稗田原遺跡緊急発掘２次調査で，今回の調査区に直接連続するＦ46～52区の南壁セクションが報告されているが，１ｂ層がⅣ層，２層がⅤ層，３層がⅦ層，４層がⅧ層，６層がⅩ層に対応すると考えられる。

セクション図は代表的なＣＤ２，ＡＢ７，12，13，14，18区の南壁を提示した。

以下，下層から順に各層序について説明する。

Ⅹ層は黒褐色のパミス混じりシルト層で，非常に固く締まり，粘性は低い。２次調査時の６層に対応する。いわゆるカシノミ層である。Ⅷ層は褐色シルト層でしまりは弱く粘性は低い。４層に対応する。アカホヤ層。Ⅸ層はⅧ層からⅩ層への漸移層であろう。２次調査時の５層に対応する可能性が高い。Ⅶ層は六ツ木火砕流の流土が水成堆積したもので，上面はマンガン・鉄が沈着し硬化面を形成す

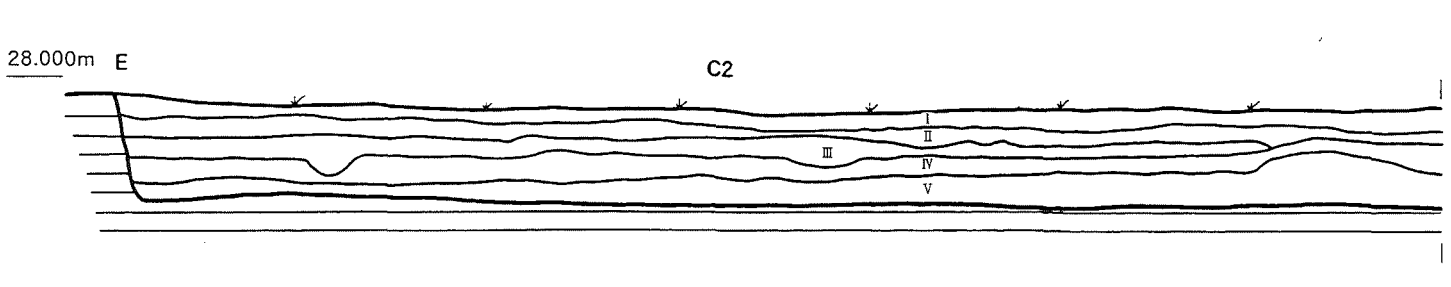
る。これを河道状に切るように堆積するのがⅤ・Ⅵ層である。古代を主として縄文，中世の遺物を含んだ土石流堆積層である。

上面には中世の整地層（Ⅳ層，厚さ10～20cm）があり，火砕流及び土石流による不整地面を調整している。その後近世に客土（Ⅲ層，厚さ20～30cm）され，畑として使用され現在に至る。

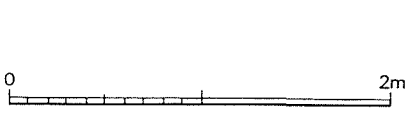
今回の調査区は１～10区の北半と11～19区の南半で土層の堆積状況に若干の差異がある。基本的に北半・南半ともにⅩ層のカシノミ層上にⅧ層のアカホヤが堆積し，さらに中世の整地層とみられるⅣ層，近世の客土，表土と続く。しかし南半では，アカホヤの上を水成堆積した4000年前の六ツ木火砕流の黄褐色シルト層（第Ⅶ層，厚さ20～60cm）が直接被覆している。その堆積はＡＢ14～17区でもっとも厚く，ＡＢ12区から北と18区から南では10～20cmほどに薄くなり，調査区北端では確認不可能になる。六ツ木火砕流は過去の調査でも確認されているが，今回の調査ではこのⅦ層を土石流（Ⅴ・Ⅵ層）が二度にわたり浸食している様相が確認できた。

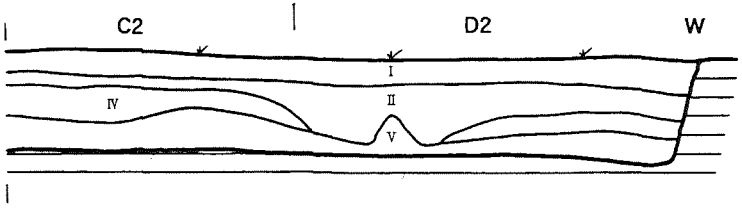
土石流は六ツ木火砕流堆積層を河道状に削り取りながらＢ19区から18区を通り，Ａ17～13区を走ってＡ11，12区で東に抜けていく。層序から見るとⅥ層がⅦ層を河道状に削り取って流れ，堆積した後に，さらにⅤ層がほぼ同方向にⅥ層を浸食しながら流れたものと考えられる。これらは流路方向から，おそらく眉山か普賢岳を起源とし千本木を通過してきたと推定される。層中に含まれる遺物は縄文時代から古代に至るが，主体は古代にあり，発生も当時期に推定される。発生の際に上流から各時期の遺物を巻き込みながら調査区まで流れてきたのであろう。

第5図　グリッド配置図（S＝1／600）

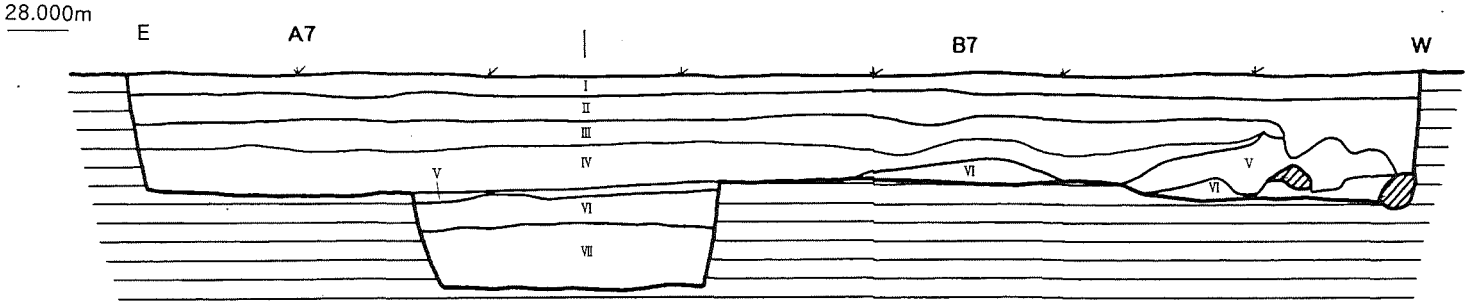


I　層　Hue7.5YR2/2 黒褐色土層
II　層　Hue7.5YR2/2 黒褐色土層
IIIa層　Hue7.5YR2/3 極暗褐色砂混シルト質土層（bよりやや暗い）
b層　Hue7.5YR2/3 極暗褐色砂混シルト質土層
IV　層　Hue7.5YR4/4 褐色土層
Va層　Hue7.5YR3/3 暗褐色シルト質土層
b層　Hue7.5YR3/3 暗褐色シルト質土層（aよりやや明い）
c層　Hue7.5YR3/3 暗褐色シルト質土層（不純物が少ない）
VIa層　Hue10YR7/1 灰白色砂礫層
b層　Hue5YR3/4 暗赤褐色砂礫層
VIIa層　Hue10YR5/8 黄褐色粘質土層
b層　Hue10YR4/4 褐色シルト層
VIII　層　Hue7.5YR4/4 褐色シルト層
IX　層　Hue10YR2/1 黒色シルト層
X　層　Hue10YR2/2 黒褐色パミス混シルト層

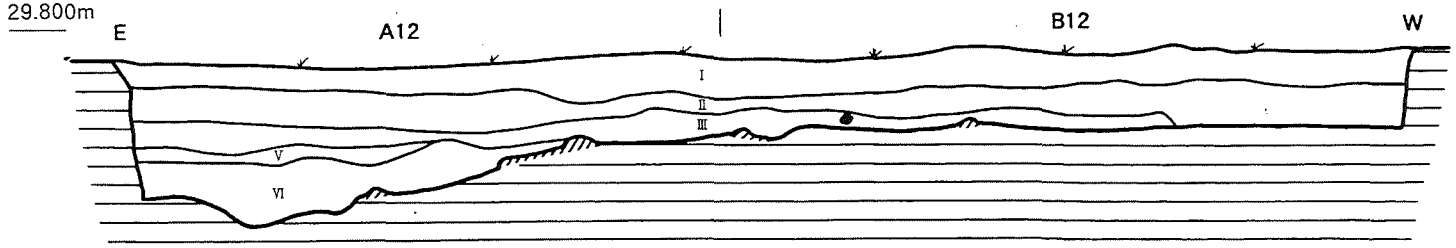




CD2 南壁土層断面図

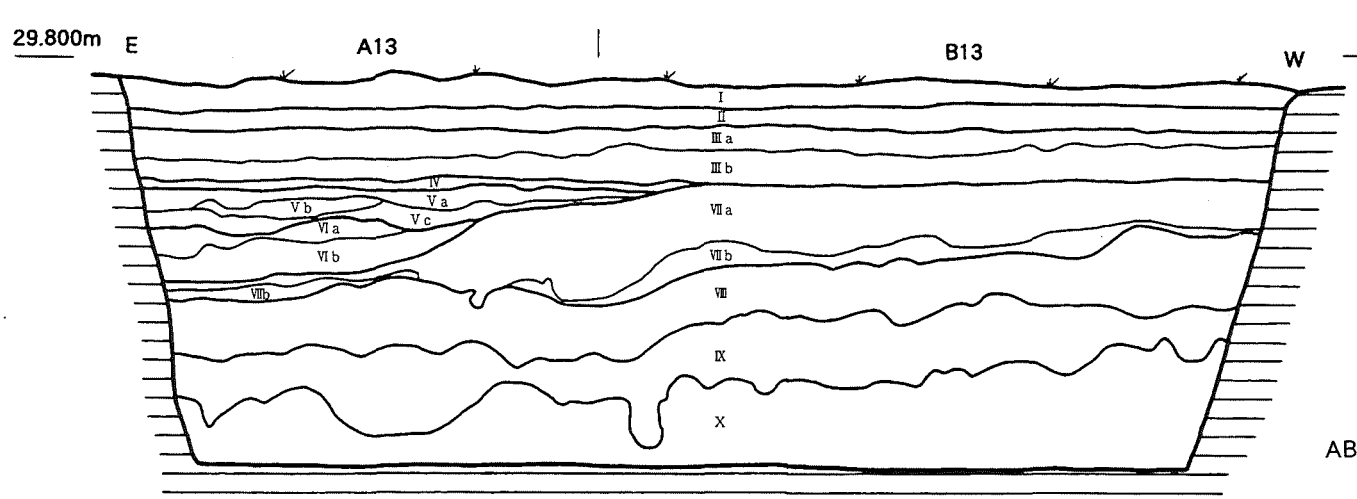


AB7 南壁土層断面図

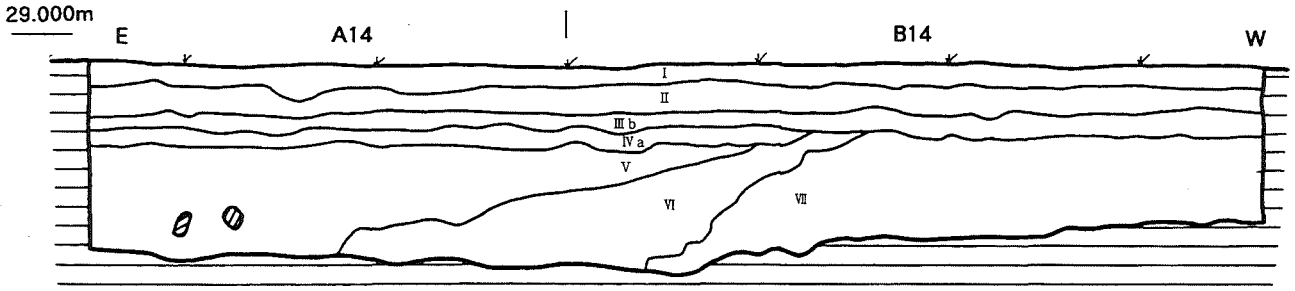


AB12　南壁土層断面図

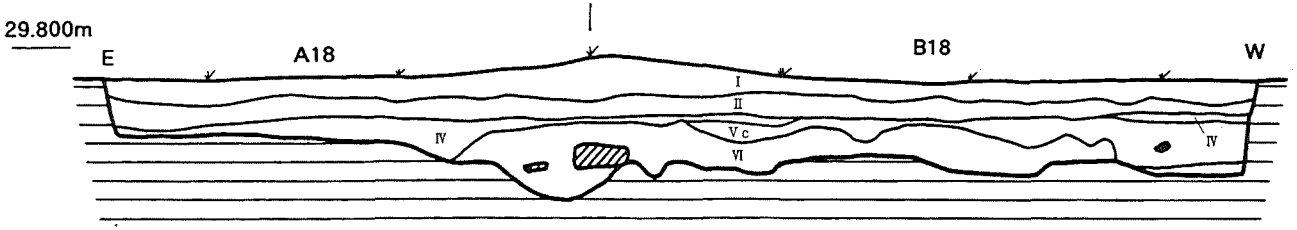
第6図　土　層　図（S＝1／40）



AB13 南壁土層断面図



AB14 南壁土層断面図



AB18 南壁土層断面図

I 層 Hue7.5YR2/2 黒褐色土層
II 層 Hue7.5YR2/2 黒褐色土層
III a 層 Hue7.5YR2/3 極暗褐色砂混シルト質土層（b よりやや暗い）
b 層 Hue7.5YR2/3 極暗褐色砂混シルト質土層
IV 層 Hue7.5YR4/4 褐色土層
V a 層 Hue7.5YR3/3 暗褐色シルト質土層
b 層 Hue7.5YR3/3 暗褐色シルト質土層（a よりやや暗い）
c 層 Hue7.5YR3/3 暗褐色シルト質土層（不純物が少ない）
VI a 層 Hue10YR7/1 灰白色砂礫層
b 層 Hue5YR3/4 暗赤褐色砂礫層
VII a 層 Hue10YR5/8 黄褐色粘質土層
b 層 Hue10YR4/4 褐色シルト層
VIII 層 Hue7.5YR4/4 褐色シルト層
IX 層 Hue10YR2/1 黒色シルト層
X 層 Hue10YR2/2 黒褐色パミス混シルト層

0 2m

第7図 土 層 図②（S＝1／40）

（3）遺構

調査により，溝状遺構３条，土石流路５条，柱穴・土坑群，集石遺構などを検出した。遺構は中世を中心とし，近世ではトイレと考えられる土坑，古代では土石流路が発見されている。柱穴は調査区全体から170を超える数を検出した。すべてⅤ層以下の土層上面に堀込まれている。層位および出土遺物から時期は中世と考えられる。以下個別に解説をおこなう。

95号土坑

直径約1.2m，深さ約40cmの円形土坑である。Ｂ８区Ⅶ層上面で検出した。堀方は底に長軸長約60cm，短軸長約40cmの楕円形の平坦面を持つすり鉢状を呈する。堀方内面の側壁には５～25cmの礫を，面を土坑の中心に向けてそろえて組み上げ，表面に漆喰に似た粘土を貼り付けて，非常に強固にたたきしめられている。サンプル採取時には鑿とハンマーを用いねばならないほどであった。この粘土は側壁から底面にまで全面に張り付けられており，水そのものあるいは水分を多量に含んだ液状の物質を溜めるか，内部からの漏洩防止を意図した構造とみてよい。厚さは２～３cmである。この遺構は何らかの上部構造の底に設けられ，便所として使用されていたものと推測される。

粘土の色調はHue2.5Y8/3淡黄色。胎土は長石が粘土になったものに１～２mmの石英，３～５mmの火山性のパミスを25～30%，細かく破砕された角閃石を若干混合している。胎土の強度を上げる目的であろう。

覆土中から浮いた状態で見込にスタンプのある龍泉窯系青磁碗１点を検出したが，覆土や出土状況から見て遺構構築時期のものではなく，埋没時に混入したものと考えられる。

306号土坑

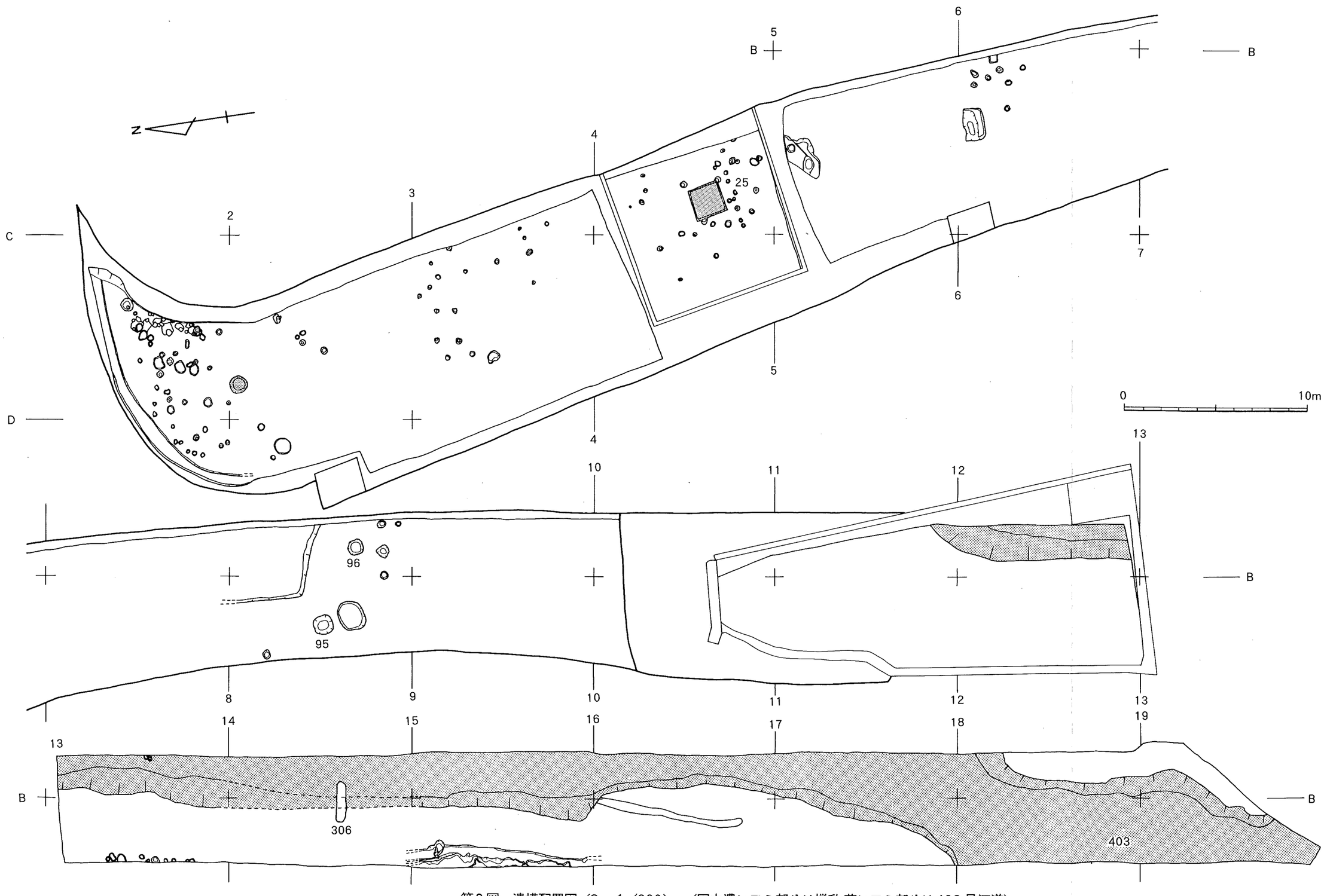
ＡＢ14区Ⅷ層上面にて検出した。長軸長約4.2m，短軸長約0.6m，深さ約0.6mの隅丸方形の土坑である。覆土中から土師器の小片が十数点浮いた状態で出土した。層位および出土遺物から時期は中世と考えられる。

403号河道（旧河道）

12～19区にかけて検出した古代の土石流路である。その幅は一部が17，18区で確認できるのみであるが，約550cm，深さ20～60cmである。土層からはⅤ層とⅥ層の二度にわたり土石流が発生していることが観察できる。遺構の状況からはこの地には土石流発生以前に六ツ木火砕流の流土が水成堆積しており，その堆積層を河道状に削り取りながら北東の海岸方向に土石流が進行していった様子が読みとれる。

稗田原遺跡遺構一覧表①

番号	ｸﾞﾘｯﾄﾞ名	ｸﾞﾘｯﾄﾞ番号	時 期	備　考	径，長軸長（cm）	短 軸 長	幅	深 さ（cm）
1	A	16	中世	欠番				
2	B	16	中世	欠番				
3	B	18	中世	柱穴・円形	50			11
4	A	18	中世	柱穴・円形柱痕あり	40			14
5	A	18	中世	柱穴・円形	60			6
6	B	18	中世	柱穴・円形	70			14
7	B	18	中世	柱穴・円形	38	26		12
8	B	18	中世	柱穴・円形				
9	B	19	中世	柱穴・円形	38			13
10	B	19	中世	柱穴・円形				
11	B	19	中世	柱穴・方形柱痕あり	100	100		6（9）
12	B	19	中世	柱穴・方形	88	82		8（4）
13	A	19	中世	柱穴・方形	60	58		
14	B	19	中世	柱穴・方形	68	48		
15	B	4	中世	柱穴・円形	35			26
16	B	4	中世	柱穴・円形	30			41
17	B	4	中世	柱穴・円形	30			33
18	B	4	中世	柱穴・円形	30			29
19	B	4	中世	柱穴・円形	40			41
20	B	4	中世	柱穴・円形	20			30
21	B	4	中世	柱穴・円形	35			32
22	B	4	中世	柱穴・円形	20			16
23	B	4	中世	柱穴・円形	40			7
24	B	4	中世	柱穴・円形	30			17
25	B	4	中世	柱穴・円形	25			13
26	B	4	中世	柱穴・円形	20			17
27	B	4	中世	柱穴・円形	20			18
28	B	4	中世	柱穴・円形	20			28
29	B	4	中世	柱穴・円形	25			22
30	B	4	中世	柱穴・円形	15			23
31	B	4	中世	柱穴・円形	17			25
32	B	4	中世	柱穴・円形	40			30
33	C	1	中世	柱穴・円形	75			9
34	C	1	中世	柱穴・円形	20			10
35	C	1	中世	柱穴・円形	22			24
36	C	1	中世	柱穴・円形	40			45
37	C	1	中世	柱穴・円形	30			48
38	C	1	中世	柱穴・円形	20			40
39	C	1	中世	柱穴・円形	20			26
40	C	1	中世	柱穴・円形	20			15
41	C	1	中世	柱穴・円形	60			5
42	C	1	中世	柱穴・円形	40			10
43	C	1	中世	柱穴・円形	20			24
44	D	1	中世	柱穴・円形	20			25
45	D	1	中世	柱穴・円形	20			13
46	B	13	近世	柱穴・円形	100			7
47	D	1	中世	柱穴・円形	20			6
48	D	1	中世	柱穴・円形	20			9
49	D	1	中世	柱穴・円形	20			5
50	C	1	中世	柱穴・円形	40			10
51	C	1	中世	柱穴・円形	40	20		4
52	C	1	中世	柱穴・円形	22			9
53	C	1	中世	柱穴・方形	64	56		12
54	C	1	中世	柱穴・円形	23			6
55	C	1	中世	柱穴・円形	20			4
56	C	1	中世	柱穴・円形	22			12
57	C	1	中世	柱穴・円形	22			8
58	C	1	中世	柱穴・円形柱痕あり	22			4
59	C	1	中世	柱穴・円形	50			6
60	D	1	中世	柱穴・円形	26			7
61	D	1	中世	柱穴・円形	30			5
62	D	1	中世	柱穴・方形	20	20		8
63	D	1	中世	柱穴・円形	22			30
64	C	1	中世	柱穴・円形	18			3
65	C	1	中世	柱穴・円形	14			
66	C	1	中世	柱穴・円形	30			
67	C	1	中世	柱穴・円形	38			
68	C	1	中世	柱穴・円形	14			4
69	C	1	中世	柱穴・円形	44			9
70	C	1	中世	柱穴・円形	20			
71	C	1	中世	柱穴・方形	44	44		



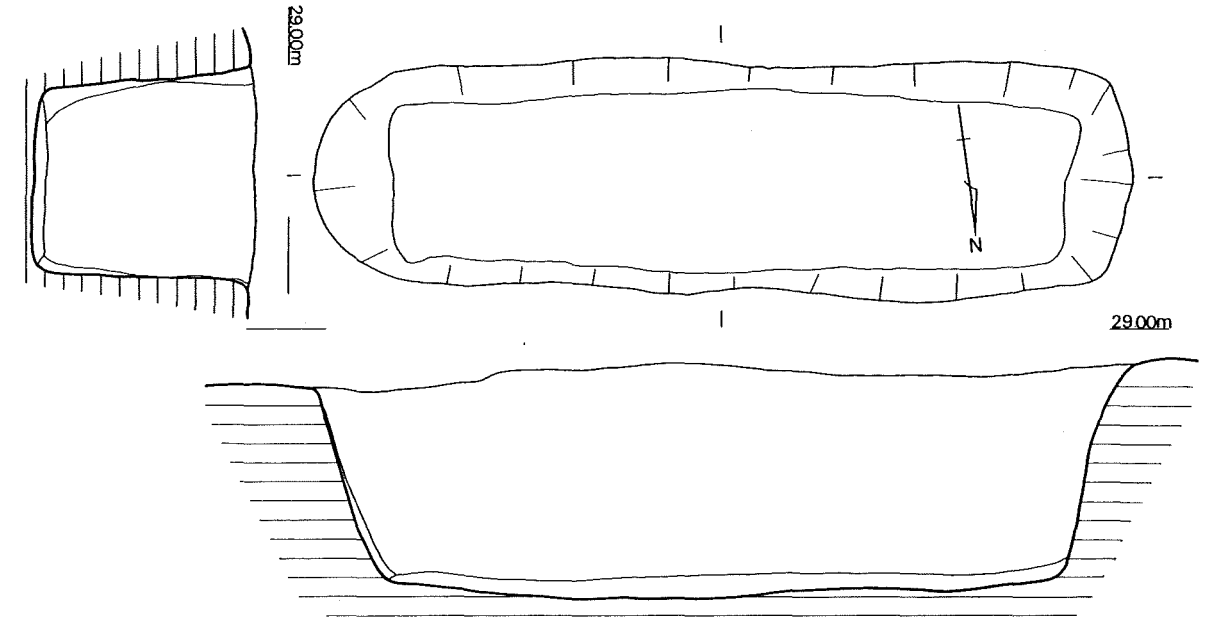
第8図　遺構配置図（S＝1／200）　（図中濃いアミ部分は撹乱,薄いアミ部分は403号河道）

稗田原遺跡遺構一覧表②

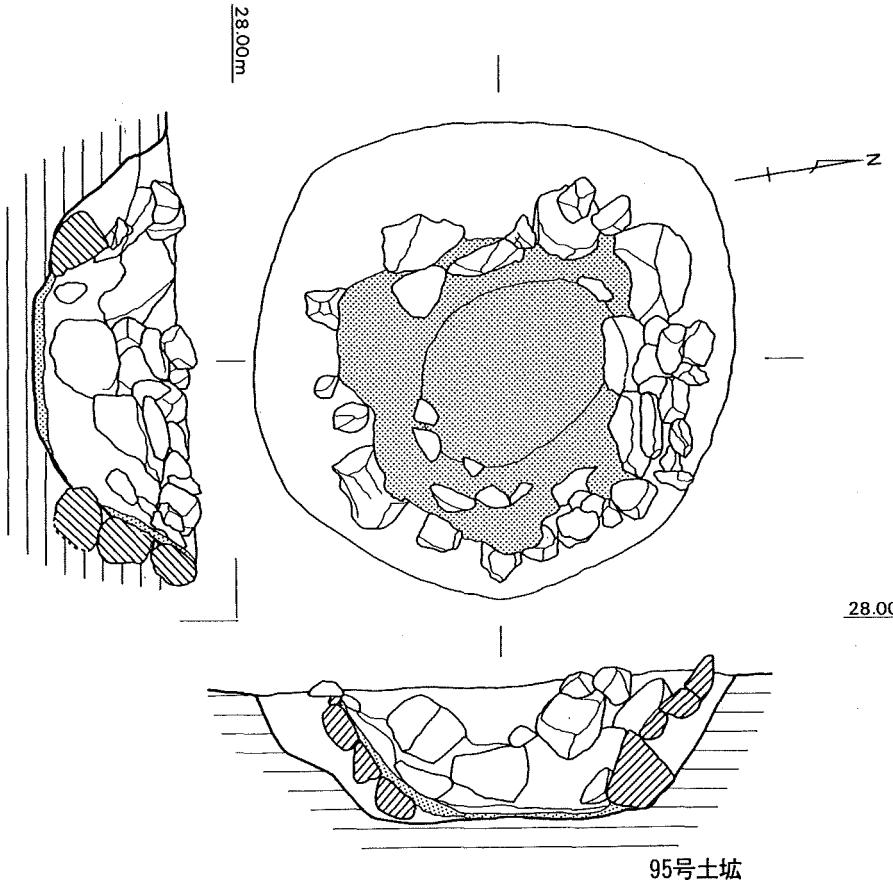
72	C	1	中世	柱穴・円形	70			10
73	C	1	中世	柱穴・円形	15			
74	C	1	中世	柱穴・円形	32			
75	C	1	中世	柱穴・円形	20			
76	C	1	中世	柱穴・円形	40			10
77	C	1	中世	柱穴・円形	30			
78	C	1	中世	柱穴・円形	18			
79	C	1	中世	柱穴・円形	20			
80	C	1	中世	柱穴・円形	20			6
81	C	1	中世	柱穴・円形	60			
82	C	1	中世	柱穴・円形	30			
83	C	1	中世	柱穴・円形	38			8
84	C	1	中世	柱穴・円形	20			5
85	C	1	中世	柱穴・円形	26			
86	C	1	中世	柱穴・円形	20			
87	C	1	中世	柱穴・円形	20			
88	C	1	中世	柱穴・円形	32			10
89	C	1	中世	柱穴・円形	12			
90	C	1	中世	柱穴・円形	40			
91	C	1	中世	柱穴・円形	40			7
92	C	1	中世	柱穴・円形	30			4
93	C	1	中世	柱穴・円形	19			
94	C	1	中世	柱穴・円形	20			4
95	B	8	近世？	トイレ？	110			34
96	A	8	中世	柱穴・円形	80			50
97	B	4	中世	柱穴・円形	14			16
98	B	4	中世	柱穴・円形	14			11
99	B	4	中世	柱穴・円形	20			18
100	B	4	中世	柱穴・円形	20			35
101	B	4	中世	柱穴・円形	25			9
102	C	4	中世	柱穴・円形	30			33
103	C	4	中世	柱穴・円形	15			6
104	C	4	中世	柱穴・円形	25			14
105	B	4	中世	柱穴・円形	20			5
106	B	4	中世	柱穴・円形	30			10
107	B	4	中世	柱穴・円形	20			8
108	B	4	中世	欠番				
109	B	4	中世	柱穴・円形	18			6
110	B	4	中世	柱穴・円形	10			6
111	B	4	中世	柱穴・円形	17			26
112	C	1	中世	柱穴・楕円形	30	20		
113	C	2	近世？	ゴミ穴？	78			11
114	B	8	中世	柱穴・円形	28			5
115	B	8	中世	礫穴・円形	158			48
116	A	8	中世	柱穴・円形	40			38
117	A	8	中世	柱穴・円形	62			35
118	A	8	中世	柱穴・円形	38			40
119	A	8	中世	柱穴・円形	22			12
120	B	6	中世	柱穴・円形	27			9
121	B	6	中世	柱穴・円形	36			10
122	B	6	中世	柱穴・円形	30			10
123	B	6	中世	柱穴・円形	35			13
124	B	6	中世	柱穴・円形	30			8
125	B	6	中世	柱穴・円形	30			10
126	B	6	中世	柱穴・円形	26			10
127	B	6	不明	不明土坑　長方形	176	60		12 (83)
128	B	5	中世	柱穴・円形	48			17
129	B	5	中世	柱穴・円形	32			36
130	B	5	中世	柱穴・円形	40			14
131	B	5	中世	柱穴・円形	32			20
132	C	3	中世	柱穴・方形	42	42		10
133	C	3	中世	柱穴・円形	12			26
134	C	3	中世	柱穴・円形柱痕あり	28			6 (15)
135	C	3	中世	柱穴・円形柱痕あり	25			30
136	C	3	中世	柱穴・円形	25			9
137	C	3	中世	柱穴・円形	16			10
138	C	3	中世	柱穴・円形	23			15
139	C	3	中世	柱穴・円形柱痕あり	26			12
140	C	3	中世	柱穴・円形柱痕あり	30			25 (38)
141	C	3	中世	柱穴・円形	26			10
142	C	3	中世	柱穴・円形柱痕あり	20			33
143	C	3	中世	柱穴・方形	24			7
144	C	3	中世	柱穴・円形	29			13

稗田原遺跡遺構一覧表③

145	C	3	中世	柱穴・円形	60			15
146	C	3	中世	柱穴・円形柱痕あり	25			37 (44)
147	C	3	中世	柱穴・円形	20			14
148	C	3	中世	柱穴・円形柱痕あり	30			40 (8)
149	C	3	中世	柱穴・円形	20			14
150	B	3	中世	柱穴・円形	16			10
151	B	3	中世	柱穴・円形	20			8
152	A	13	中世	柱穴・円形	23			14
153	A	13	中世	柱穴・円形	20			10
154	B	13	中世	柱穴・円形	26			6
155	B	13	中世	柱穴・円形	21			6
156	B	13	中世	柱穴・円形	21			5
157	B	13	中世	柱穴・円形	48			13
158	B	13	中世	柱穴・円形	26			12
159	B	13	中世	柱穴・円形	18			11
160	B	13	中世	柱穴・円形	40			13
161	B	13	中世	柱穴・円形	17			10
162	B	13	中世	柱穴・円形	25			13
163	B	13	中世	柱穴・円形	21			9
164	B	13	中世	柱穴・円形	27			11
165	D	1	中世	柱穴・円形	16			4
166	B	19	中世	柱穴・円形	28			14
167	B	19	中世	柱穴・楕円形	70	40		13
168	B	19	中世	柱穴・惰円形	36	24		10
169	B	19	中世	柱穴・円形	16			16
170	B	19	中世	柱穴・円形	20			18
171	B	19	中世	柱穴・円形	62			22
172	B	19	中世	柱穴・円形	20			10
173	A	17	中世	柱穴・円形	50			8 (13)
174	D	2	中世	柱穴・円形	24			7
175	D	2	中世	柱穴・円形	90			8
176	D	2	中世	柱穴・円形	36			8
177	C	2	中世	柱穴・円形	36			25
178	C	2	中世	柱穴・円形	34			30
179	C	2	中世	柱穴・円形	35			22
180	C	2	中世	柱穴・円形	22			14
181	C	2	中世	柱穴・方形	40			16
201	B	16・17	古代	土石流路			20～40	4
202	B	16・17	古代	土石流路			40～	2
203	A	19	中世	溝状遺構			40	6～16
204	AB	13	近世？	溝状遺構			100	10～40
205	B	15	古代	土石流路			60	4～6
206	B	16	中世	溝状遺構			40	
207	B	15	古代	土石流路			50～	10～20
301	B	16	不明	不明土坑　長楕円形	120	58		10
302	B	16	不明	不明土坑	300	104		3
303	B	17	不明	集石土坑				
304				欠番				
305				欠番				
306	AB	14	中世	隅丸方形土坑	220	60		60
307	B	16	不明	隅丸方形土坑	158	50		12
401	B	5	中世	不明遺構	287	161		
402	B	16	中世	集石遺構				
403	AB	12～19	古代	旧河道			550	20～60

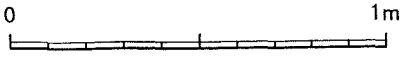


306号土坑



95号土坑

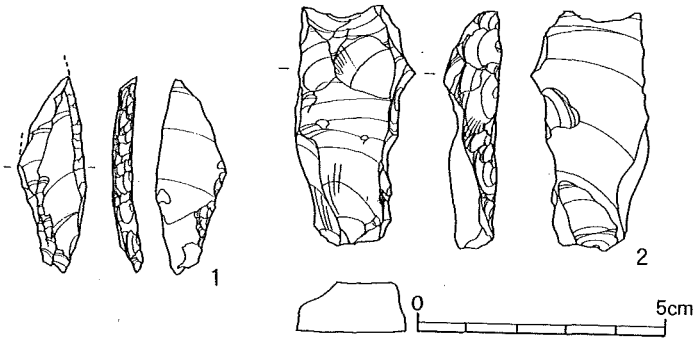
(図中アミ部分は貼り付け粘土)



第9図　306・95号土坑実測図（S＝1／20）

（4）遺物

①旧石器時代の遺物（第10図１・２）



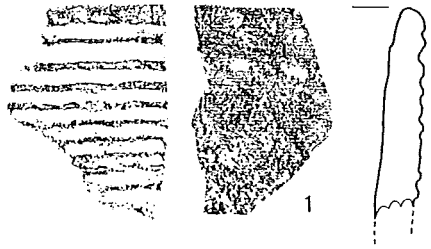
第10図　旧石器時代の遺物

旧石器時代の遺物としてはナイフ形石器・台形石器，各１点が出土している。

１は透過性のある青白色黒曜石を使用した柳葉形のナイフである。かなり整った縦長剥片を素材とするが，刃部・基部とも新しい傷をもつため詳細は不明である。基部の裏面調整は，諫早市柿崎遺跡のナイフ形石器の一群と通じるものがある。２は摩滅が著しく，他からの流れ込みと思われる。漆黒色黒曜石の縦長剥片を使用し，両側辺にブランティング加工を直線的に入れた日ノ岳タイプのものである。旧石器時代の資料は，数回に及ぶ稗田原遺跡の調査のなかでも初めての出土であるが，包含層出土でないことや，２のように明らかに転磨した痕跡をもつことから，遺跡の西側に旧石器の遺跡が存在する可能性が強い。

②縄文時代の遺物

１）土器（第11図１）



第11図　縄文時代の土器

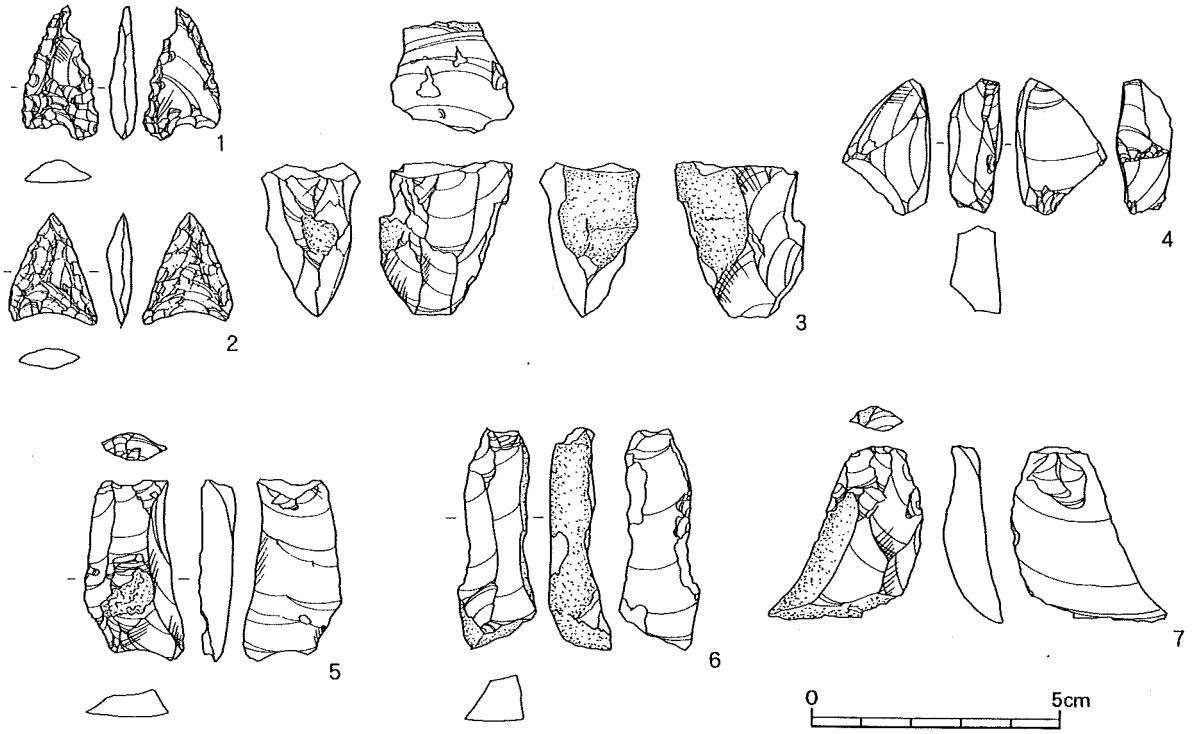
１は円筒形条痕文土器の口縁部片で器壁の厚さは約１cm。外面には口唇直下より横走する強い沈線状条痕が施され現存10条を数える。内面はナデ仕上げ。胎土はキメ細かく精良だが，比較的多くの石英粒と角閃石，少量の長石，輝石を含む。焼成は良好で堅く，表面は淡褐色，内部は灰褐色～灰黒色を呈する。

②石器（第12図１～第14図20）

【石鏃（１・２）】　３点が出土している。１は漆黒色の黒曜石を素材としたもので，基部を中心に剥離をおこなうが，側辺加工は鋸歯加工を意図しており，縄文後期前葉の鋸歯鏃に加工が類似している。２は安山岩製のもので，正三角形を呈し先端部は尖鋭。基部は緩やかにカーブする。脚部の特徴や安山岩の素材は，晩期以降の石鏃に類例が多い。

【石核（３）】　縦長剥片剥離を意図した石核で，単設打面で前面を主作業面としている。不純物が多量に混じる黒曜石を素材としているため，途中でヒンジをおこし廃棄されたものであろう。

【彫器（４）】　きわめて良質の漆黒色黒曜石製で，２面に樋状剥離が加えられた彫器である。中央から折損した大形の製品を再加工したものと思われ，樋状剥離は全体で３本観察できる。樋状剥離面の上下には細かな剥落痕が観察できることやリングが密であることなどから，両極技法によって彫刀面を作り出したものであろう。



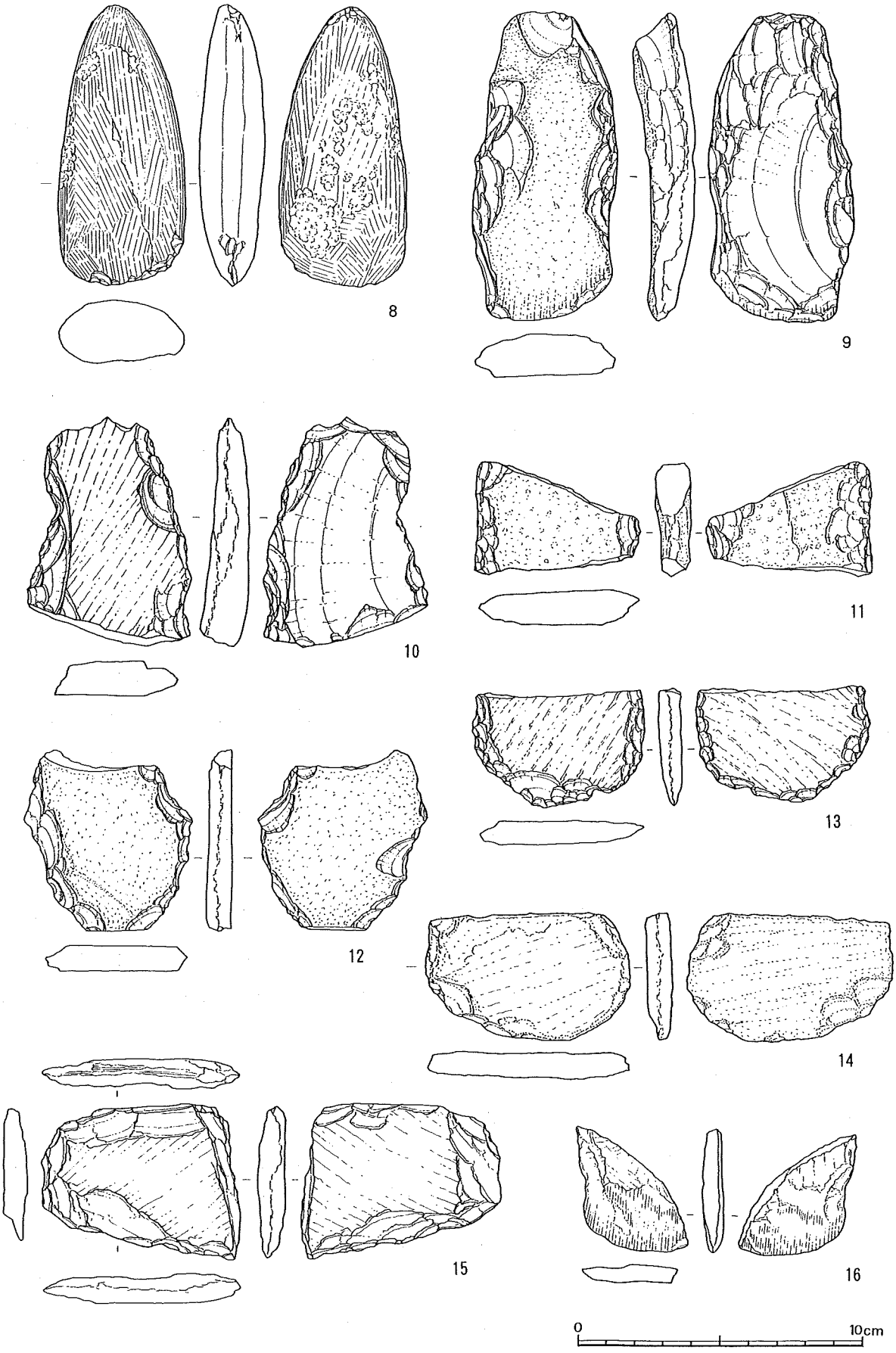
第12図　縄文時代の石器①（S=1/2）

【剥片（５～７）】　すべて黒曜石製である。５は３の石核と同様な不純物を含むが，打面調整を丁寧におこなっており，表面に残された旧剥離面からも，縦長剥片剥離を意図したことが窺える。６も剥片上に残された旧剥離面の観察から，連続的に縦長剥片を剥離したことが窺えるが，剥離した剥片の底辺や側辺に自然面が残されていることが考えられる。７はノの字状の剥片で底辺，側辺に自然面を残すもので，晩期の剥片に特徴的な寸詰まりな剥片である。

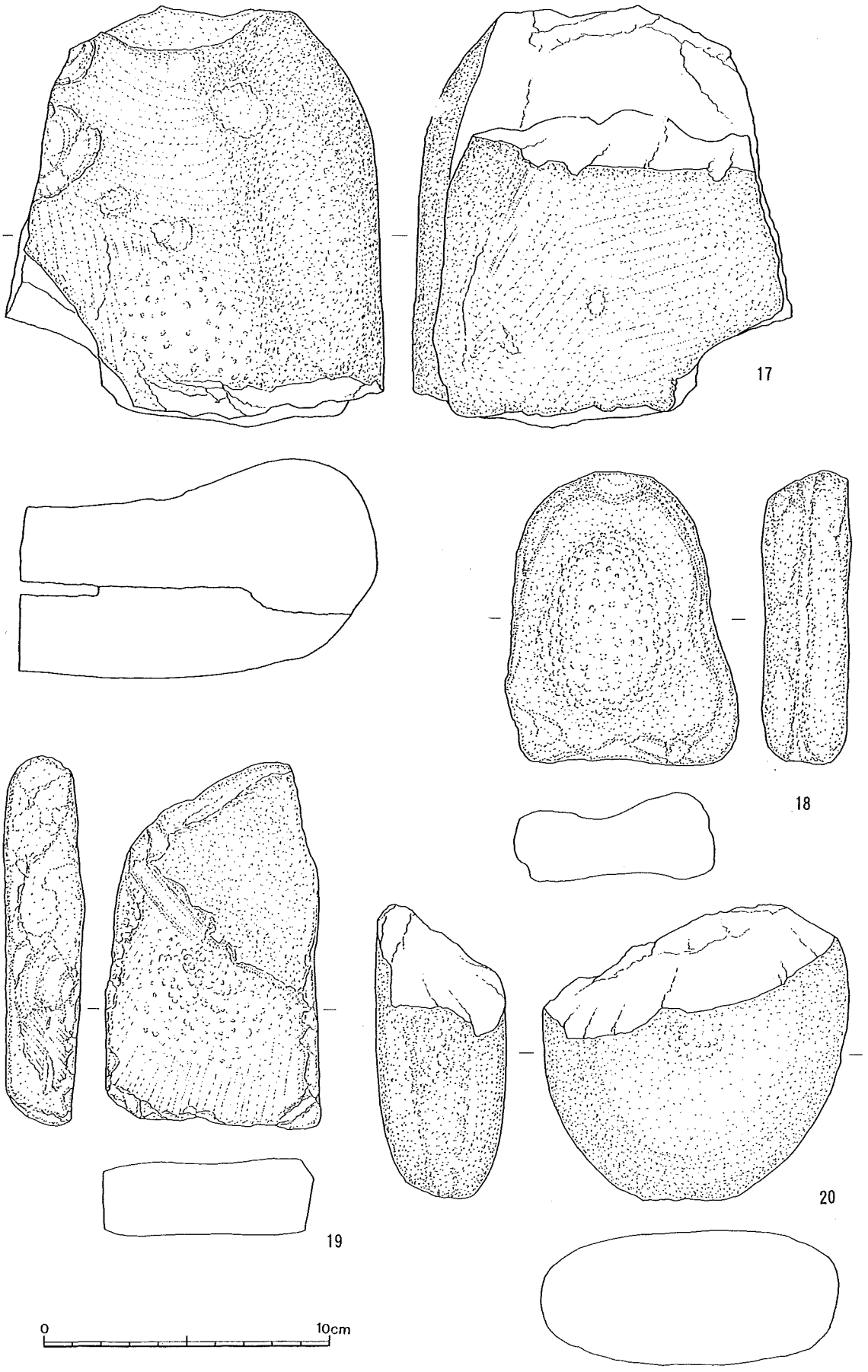
【磨製石斧（８）】　敲打整形の後，全面に丁寧な研磨を施した磨製石斧である。刃部には刃こぼれが著しく，左右はやや非対称。茶黒色を呈する堅緻な岩石で深成岩と思われる。

【打製石斧（９～13】９は安山岩製の横長剥片を素材とし，周縁に粗雑な加工を施したもの。刃部には摩耗痕が認められるが，とりわけ自然面側に顕著である。10は９と同様の石質・素材だが，平面形は非対称で，刃部を欠損する。11～13はいずれも輝石安山岩の板状節理片を利用した扁平打製石斧である。11は上下を欠失した胴部片。12は頭部片と思われるが，僅かな摩耗が見られることから，刃部の可能性もある。13は刃部破片で，両面に摩耗痕が認められる。

【石庖丁形石器（14～16）】　いずれも片理に沿って薄く割れた緑色片岩製である。14は下縁に刃部を作出したもので，使用によると思われる摩耗が著しい。上辺は折断により直線状をなすが，稜部には僅かな摩耗が認められる。15はほぼ全周に打ち欠きを加えて略台形に仕上げたものである。上辺は研磨を施しているため直線状をなし下縁の刃部には摩耗痕が観察される。16は両面に研磨を施したもので，磨製石庖丁形石器とでも呼ぶべき資料である。『稗田原遺跡Ⅱ』第22図59と同一個体ではないかと思われるほどに酷似する（註１）。刃部や側縁には研磨とは異なる摩耗痕も観察されることから穂摘具的な用途が考えられよう。



第13図　縄文時代の石器②（S＝1／2）



第14図　縄文時代の石器③（S＝1／2）

【石皿（17）】　全体の約１／４の破片が、層理面に沿って２枚に割れた状態で出土した。石材は絹雲母と細粒～中粒の石英粒を多量に含む砂岩である。表裏とも滑らかに磨かれているが，部分的には敲打痕や明瞭な線状痕が観察されることから，台石や砥石としても利用されたものと思われる。

【凹石（18）】　17に類似する砂岩製であるが，石英の粒度はやや小さい。中央に大きな凹みを有する。この凹みは小さな痘痕状敲打痕の集合となっており,裏面にも同様のダメージが残されている。

【砥石（19）】　18と同様の層理面に沿って割れた板状砂岩を素材とする。正面および側面の一部が丁寧に研磨されており砥石と考えられる。正面中央は敲打の集中により凹状を呈し，その上方には幅５㎜，長さ３㎝の浅い溝状の研磨痕も観察される。裏面全体には小規模の凹凸が見られるが，敲打痕かどうか判然としない。

【磨石（20）】　楕円形の水磨円礫を素材とし，両面は光沢を放つほどに磨かれている。周囲には敲打痕が鉢巻状に巡っており，磨石とともに敲石としても利用されたことが窺える。表面に酸化鉄やマンガンが付着しているため不明瞭であるが，石質は安山岩系と思われる。

註１：報告書では安山岩製の打製石斧とされている。

【小　結】

［旧石器時代］　今回の調査ではナイフ形石器と台形石器が発見された。これが現地性の遺物であれば稗田原遺跡の開始期が旧石器時代にまで遡ることを示す重要な物証である。しかし土石流堆積層からの出土であり，台形様石器が著しく摩耗していることを考えれば異地性の可能性も高く，該期の明確な包含層が確認されるまでは結論を留保すべきであろう。

［縄文時代］

早期：過去の調査において押型文土器や円筒形条痕文土器が出土しており，包含層も確認されていたが，今次調査でも追加資料を得ることができた。円筒系条痕文土器は，最近，水ノ江和同により「一野式」と命名された土器であり（水ノ江1998），中九州を中心に鹿児島県や宮崎県などでも出土例がある。県内では諫早市西輪久道遺跡，鷹野遺跡，牛込Ａ・Ｂ，有明町一野遺跡，島原市畑中遺跡など諫早平野から島原半島にかけての地域にのみ発見例があり，稗田原遺跡での確認は，こうした分布の偏在性を補強する事例として重要である。

晩期：過去の調査で良好な一括資料が得られている。今回，土器については未発見であったが，図示した石器の大部分は晩期の所産と考えて大過ないものと思われる。

剥片石器類としては，打製石鏃，彫器，石核，剥片，砕片などがあり，石材は黒曜石とサヌカイト質安山岩が多用されている。黒曜石はやや不純物が目立つものの漆黒色を呈し，礫面の特徴から佐賀県伊万里市腰岳産と思われるものである。サヌカイト質安山岩の産地は不明ながら灰白色の自然面が特徴的な石材である。また石器製作を技法的側面から観察した場合，「十郎川型剥片剥離技術」（橘1984）を基盤とすることは明らかである。これらの特質は西北九州の晩期諸遺跡と共通するものであり，過去に発見されている多量の晩期土器とともに石器群を該期に帰属させうる有力な事象である。

礫石器類では磨製石斧，打製石斧，石庖丁形石器，石皿，凹石，磨石，砥石などがある。打製石斧は石材に安山岩を用いる点で共通するが，素材は大型の横長剥片と節理に沿って割れた板状岩片の二者がある。いずれも扁平打製石斧と呼ばれるものだが，前者は側面観の反りが強く，後者は直線的である。使用痕との相関など分析を深めれば着柄や使用法を推定する上での手掛かりになるかも知れない。石庖丁形石器としたものは，当初から名称に困惑した資料である。むろん収穫具であろうとの認識はあったが，具体的な使用法や対象物を特定することはできない。今回発見された３点は，いずれも緑色片岩系の薄い岩片を素材としており，研磨あるいは打ち欠きによって刃部を作出している。大分県二本木遺跡（清水・坂本・讃岐1980）で「石庖丁形石器」とされたものに酷似しているため同名称を継承したが，過去の報告でスクレイパーや打製石斧に分類されたものの一部には，今回の石庖丁形石器と共通するものも見受けられる。

〔参考文献〕

福田一志　1981　「柿崎遺跡」『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅰ』
長崎県文化財調査報告書第54集　長崎県教育委員会

水ノ江和同　1998　「九州における押型文土器の地域性」『九州の押型文土器　－論攷編－』　九州縄文研究会

村川逸朗編　1998　『稗田原遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書　第145集　長崎県教育委員会

清水宗昭・坂本嘉弘・讃岐和夫　1980　「第２章　第４節－３　遺物についての２・３の問題　（１）石器」
『大野原の遺跡　－大分県大野郡大野町所在遺跡群発掘調査報告書－』　大野町教育委員会

橘昌信　1984　「縄文晩期の石器　－西北九州における縄文時代の石器研究（六）－」『史学論叢』
別府大学史学研究会

③古代

旧河道出土の遺物（第15・16図）

調査区の11区から19区において，旧河道が確認された。遺構という訳ではないが，比較的まとまった時期の遺物が出土したため，準一括資料として報告したい。

1～3は須恵器である。1は杯で一部に煤がのこり，灯明皿への転用が考えられる。2は，高台付杯で高台内に文字が刻書される。残存する上下二文字のうち，下の文字は「井」とよめるが，上の字は判読不明である。

4～15は，土師器の杯で，いずれも底部はヘラ切り離しである。土器のつくりから，他地域からの搬入品と考えられるものと，在地系のものと二系統があるようである。4～7は，搬入品と考えられる。薄いつくりで軽いのが特徴で，器表が白っぽいものが多い。胎土は比較的細かく，雲母や石英の粒をわずかに含んでいる。焼成は，良好である。8～15は，在地系と考えられる。厚いつくりで，重く感じられる。胎土は粗いものが多く，石英・長石・雲母そのほかの粒子が，ときに大粒で含まれている。体外面のヨコナデが波打つように認められるものが多い。14は見込に文字が刻書されるが，判読は不明である。16は，土師器の高台杯で体外面下部に沈線が認められる。17は土師器の皿。18・19は，土師器の甕である。

以上，旧河道出土の遺物を概観すると，体部下半が丸みをおび，外面にヘラケズリがみられる須恵器（2・3）が最も古いものと考えられる。年代としては，7世紀後半（註1）頃が考えられるが，量的には少ない。遺物の主体は土師器の杯で，ヘラ切りの後，ヘラケズリをせず，体部に回転ヨコナデを加えたものが多い。年代的には8世紀の後半頃（註2）が考えられよう。遺物の下限も，一応この頃と考えられるが，層位出土の遺物の中には，9世紀代のものと考えられるものもあり，やや年代幅が広がる可能性もある。

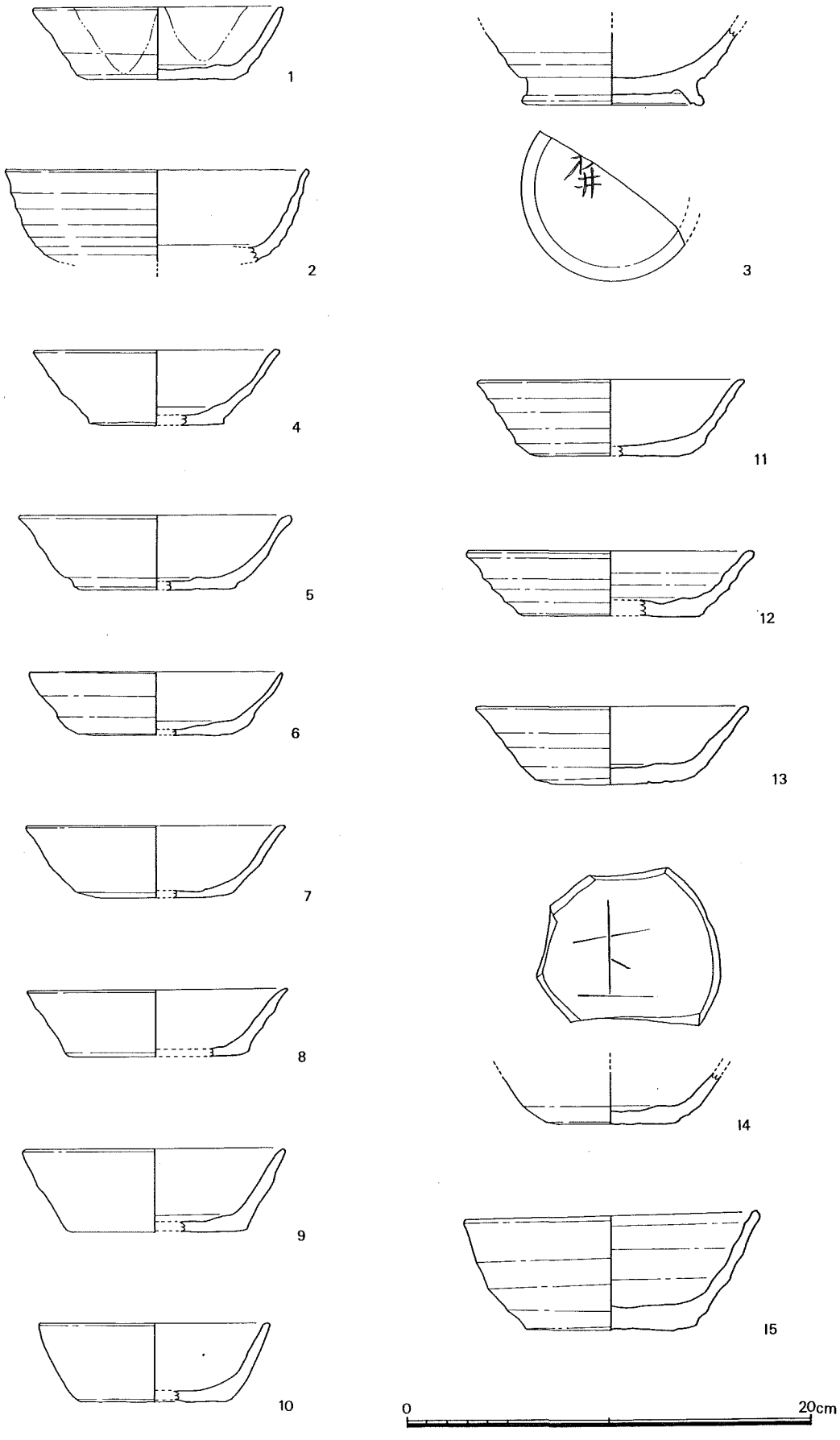
層位出土の遺物［古代］（第17・18図）

各地区の層位出土の遺物のうち古代の遺物は約23,000点で，輸入陶磁器，須恵器，土師器，黒色土器，瓦質土器などがある。以下に概略を記す。

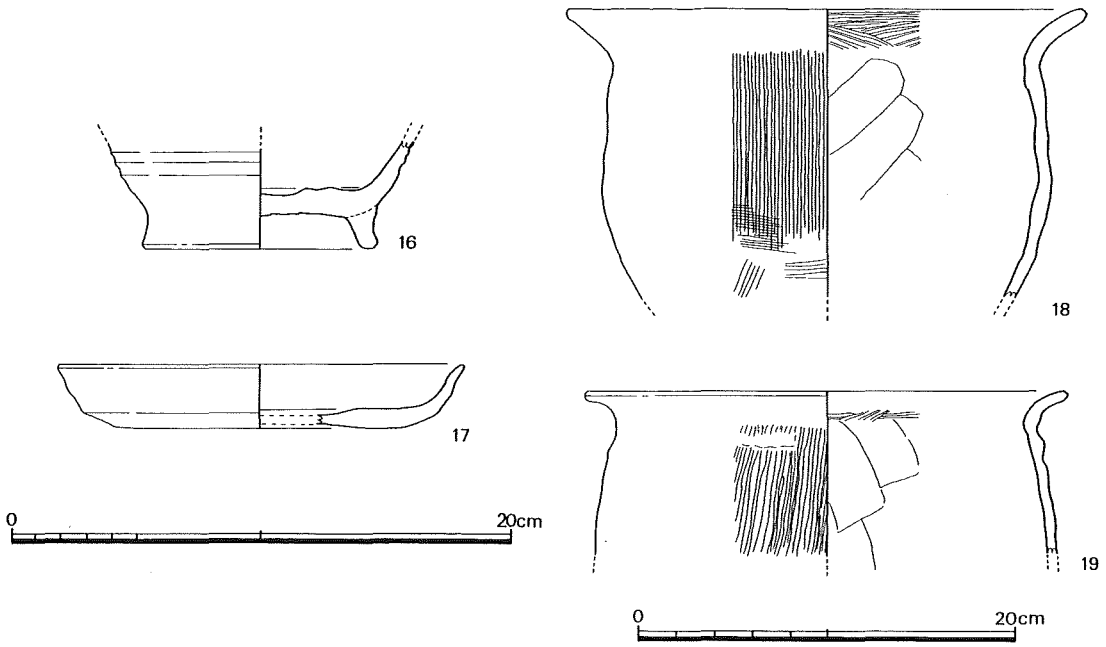
20は，越州窯系青磁碗である。オリーブグリーンの釉がかかり胎土の精良ないわゆるⅠ類（註3）に属するものである。体下部は欠損しているが，蛇ノ目高台のものであろう。見込には目跡が残る。

21～28は土師器の杯で，いずれも底部はヘラ切り離しである。21は，丸底にちかいもので金雲母を多く含み，やや他と特徴が異なる。22～27は，体部から口縁部にかけて直線的にひらくもの，28は体部がやや丸みをおびるものである。29は，須恵器の鉢で，体外面にヘラによる沈線が認められる。30～32は，土師器の高台杯で，ともに底部の特徴が似る。30は，体部から口縁部にかけてやや外反ぎみに立ち上がる。32は，見込に文字が刻書される。右側を欠いているが「七」であろうか。　33は，土師器の杯の底部で文字が刻書される。上部を欠いているが「井」の字である可能性が高い。

35・36は黒色土器A類である。35に比べ，36は高台が高く，全体的に薄いつくりである。搬入品か。



第15図　旧河道出土の遺物①（S＝1／3）



第16図　旧河道出土の遺物②（S＝1／3・1／4）

37は黒色土器Ｂ類で，体部は丸みをおび口縁部はやや外反する。38は瓦器碗で，小さな断面三角形の高台がつくが，器表は風化しヘラミガキなどは認められない。

40～45は土師器の甕である。いずれも，体外面と頸部内面はハケメ，体部内面はケズリ，口縁部にヨコナデが認められる。40は，鉢形の甕で口縁部はやや外反するにとどまる。42～45は，口縁部が外反するタイプの甕で44を除いて胴部がやや張る。

層位出土の古代の遺物についても，量的な主体は旧河道と同様，土師器の杯が占めているが，年代的には，やや幅が広がるものと考えられる。古いものでは，図化できなかったが，須恵器の杯身があり，７世紀初頭頃の特徴をしめす（註４）。また，新しいものでは，黒色土器Ｂ類や，瓦器椀があり，12世紀前後頃と考えられるが，量的には少ない。

④中世

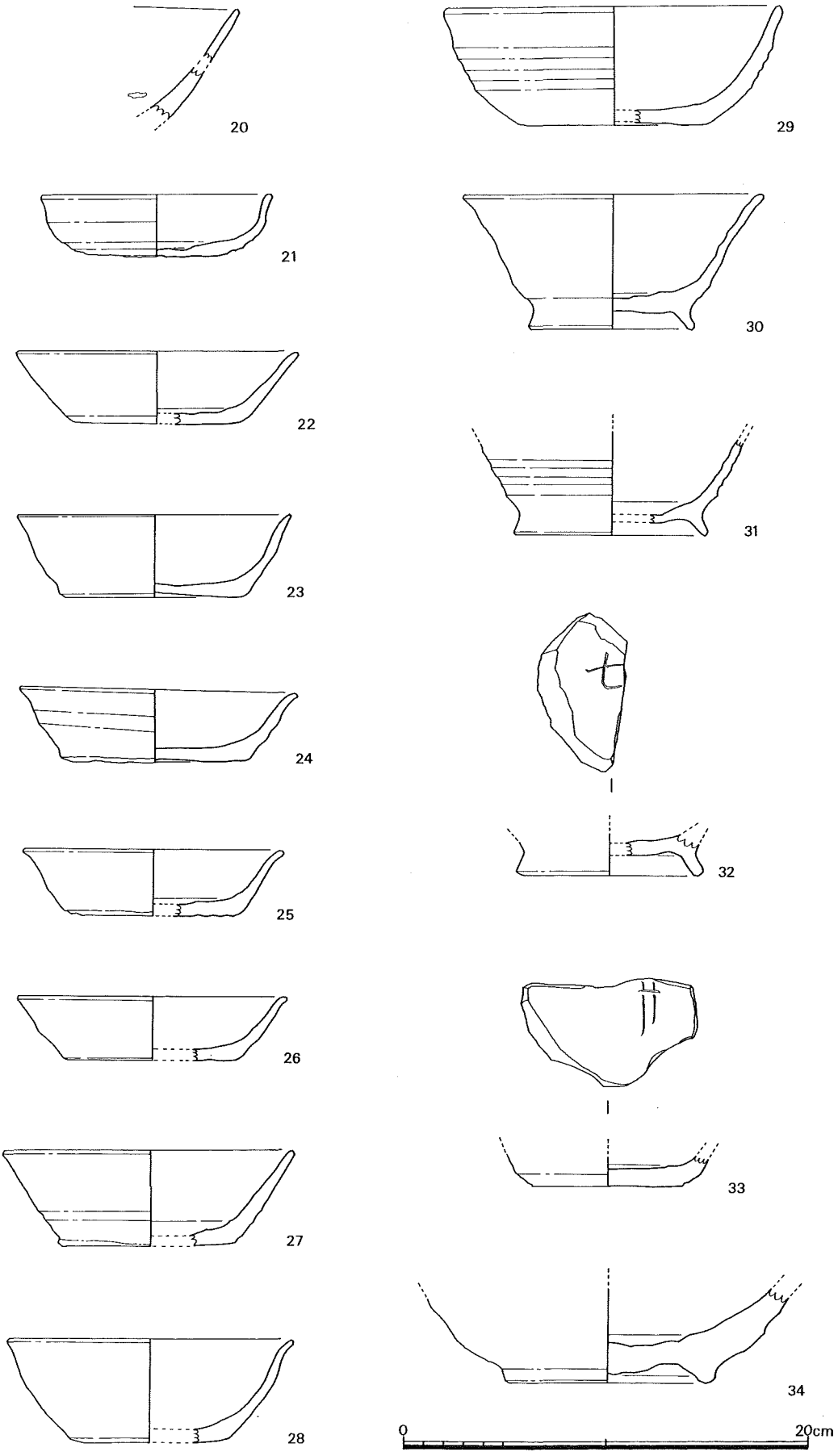
層位出土の遺物［中世］（第19・20図）

中世の遺物は約1,500点が出土した。遺構からも若干の遺物が出土したが，ひとつの遺構から１点出土するような状況で，一括資料といえるようなものはなかった。したがってここでは，層位出土のものとまとめて報告することしたい。

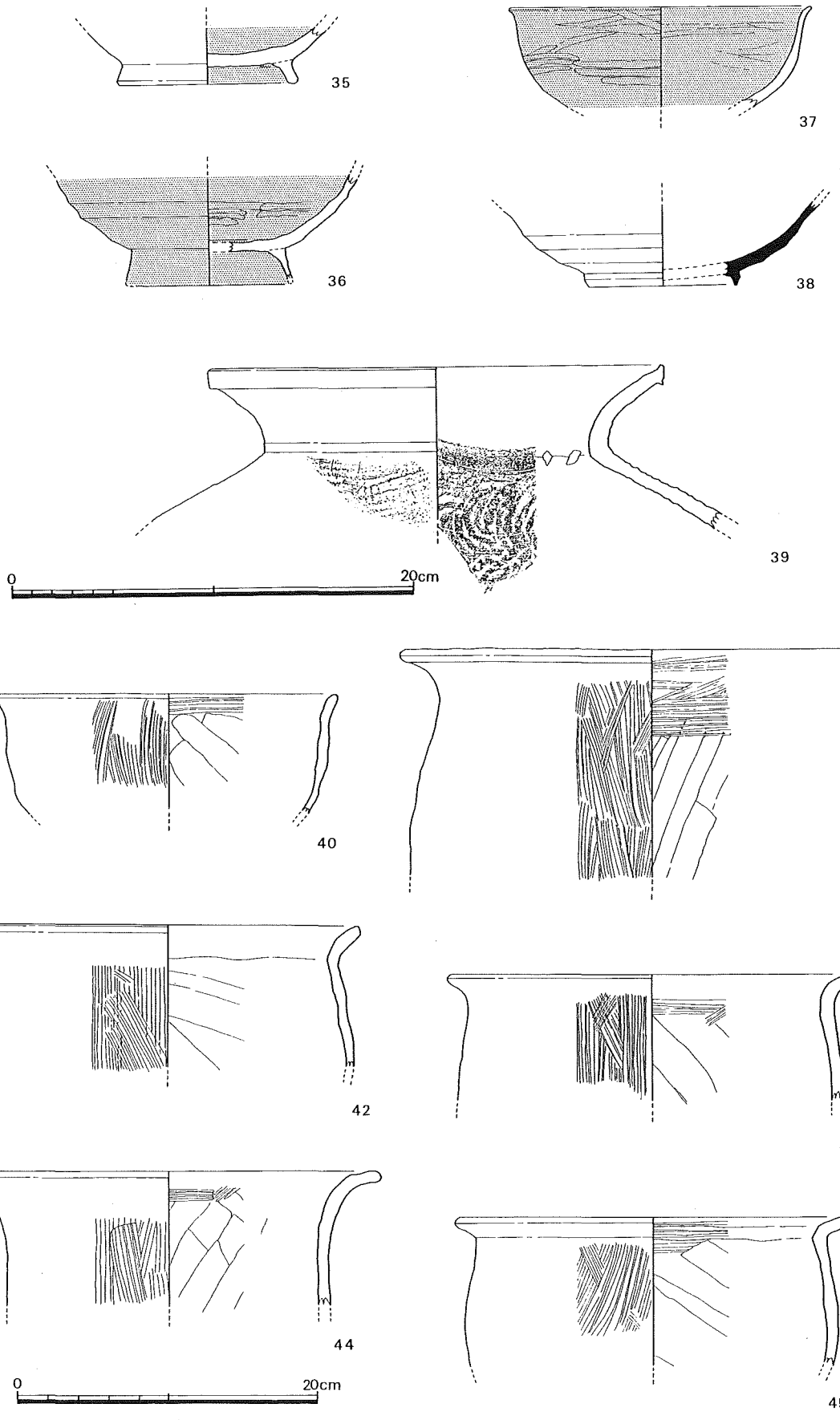
46～48は，中国，龍泉窯系の青磁碗である。46は見込に「上」の文字，47は草花文が彫り込まれる。体外面には，大きな蓮弁文が認められる。48は無文。いずれも明代のものであろう（註５）。

49・50は，中国産の白磁である。49はいわゆる口禿の白磁皿でやや青味がかった釉がかかる（註６）。50は，見込に草花文を彫る皿で，体下部から高台内にかけては露胎となっている（註７）。

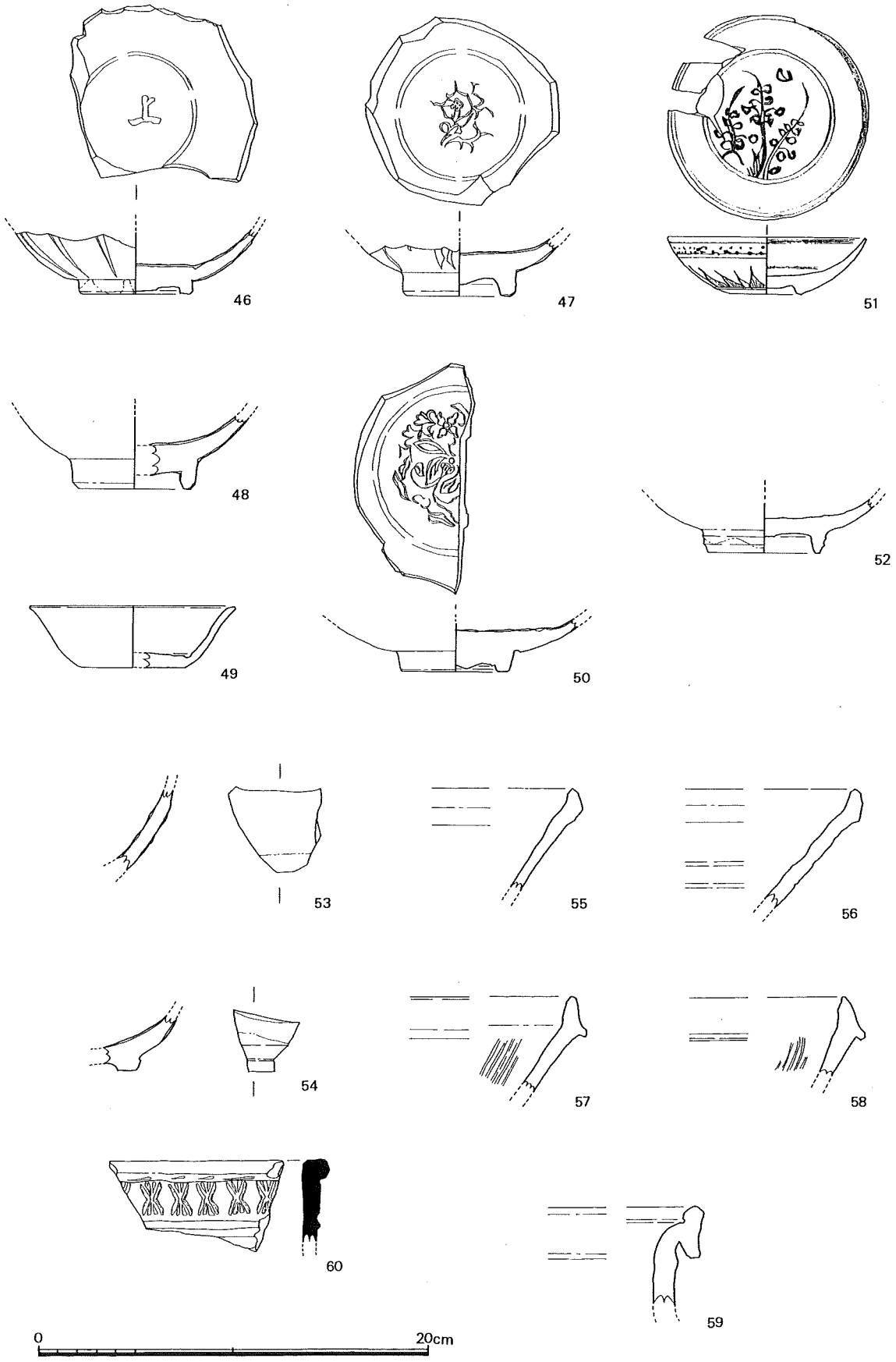
51は，明代の青花皿で呉須の発色が悪く，底部は碁笥底である（註８）。52は，李朝の青磁碗底部で高台が竹節状になっている。



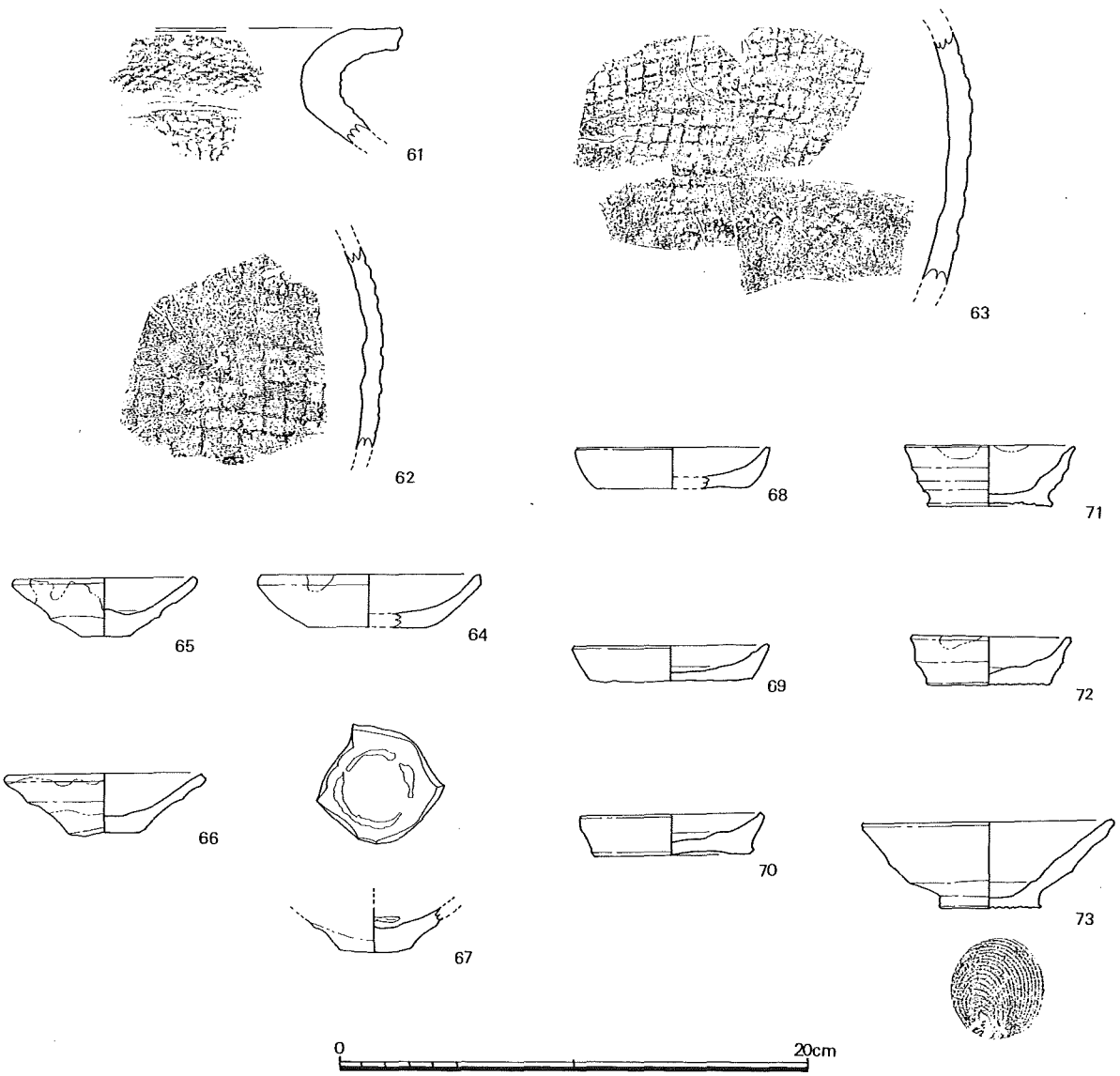
第17図　層位出土の遺物［古代］①（S＝1／3）



第18図　層位出土の遺物［古代］②（S＝1／3・1／4）



第19図　層位出土の遺物［中世］①（S＝1／3）



第20図　層位出土の遺物［中世］②（S＝1／3・1／1）

53・54は瀬戸系の天目茶碗と考えられる。53は，軟質の黄胎で体下部は露胎となっている。54は，胎土が須恵質で断面角形の高台がつく。ロクロの回転は時計回りである。

55・56は，東播系のすり鉢。57・58は備前系のすり鉢である（註９）。59は常滑系の甕の口縁部と考えられる（註10）。60は瓦質の火鉢の口縁部で，外周にスタンプが押捺される。

61～63は，須恵質の甕で，生産地はおそらく肥後の樺番城窯と考えられる。口縁部外面は，格子タタキをナデ消し，口縁端部から口縁内面にかけてヨコナデ，頸部内面から体部内面にかけてはハケメが認められる（註11）。

64～67は，陶器の小皿で，内面から口縁部にかけて褐釉，体下部から底部にかけて白色の化粧土がかけられる。胎土は赤褐色でザクザクとした感じである。底部は糸切り離しであるが，化粧土で隠される。67の見込には目跡がのこる。66の口縁部には煤痕が認められ，灯明皿への使用が考えられる。唐津系か（註12）。

68～73は，土師器の小皿である。68～70は，体部から口縁部にかけて逆ハの字形に立ち上がるタイプである。71・72は，口径に比して器高が高いタイプ。73は，小さい底径から，体部から口縁部にかけて長くのびるタイプである。いずれも糸切り底である。

74は，滑石製石鍋の転用品と考えられる。人物像あるいは仏像で，中位に穿孔が認められる。

〔註〕

註１　北部九州について，山本信夫が設定した古代Ⅰ期に含まれるものと考えられる（山本1996）。
註２　やはり，山本信夫のⅣ・Ⅴ期に含まれるものであろう（前掲同書）。
註３　土橋理子のいうＩＡ１ａであろう（土橋1995）。
註４　小田富士雄による６世紀後半頃（小田1996）。
註５　山本信夫による青磁Ⅳ類で，14世紀代とされる（山本1995）。
註６　森田勉・横田賢次郎分類による白磁皿Ⅸ類（森田・横田1978）。
註７　山本信夫による白磁皿Ｂ類で14世紀代とされる（山本1995）。
註８　小野正敏による皿Ｃ群で16世紀代とされる（小野1982）。
註９　荻野繁春の時期区分でⅨ～Ｘ期（15世紀中葉～16世紀中葉）に相当しよう（荻野1990）。
註10　中野晴久・赤羽一郎の編年による６ａ型式（13世紀中頃）か（中野1995）。
註11　地理的にみて対岸からの搬入と考えられる。特徴については美濃口雅朗の報告を参考にした（美濃口1997）。
註12　唐津系とすれば，他の出土遺物の年代観と開きがある。今後の出土状況を注視したい。

〔引用・参考文献〕

山本信夫1995「中世前期の貿易陶磁器」『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社
山本信夫1996「北部九州の土器」『日本土器辞典』雄山閣
土橋理子1995「初期貿易陶磁器」『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社
小田富士雄1996「九州地方の６世紀後半の須恵器」『日本土器辞典』雄山閣
森田勉・横田賢次郎1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館
小野正敏1982「15～16世紀の染付椀・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』№２日本貿易陶磁研究会
荻野繁春1990「財産目録に顔を出さない焼物たち」『国立歴史民俗博物館研究報告』第25集 国立歴史民族博物館
中野晴久1995「常滑・渥美」『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社
美濃口雅朗1997「樺番城窯跡の中世須恵器（１）」『肥後考古』第10集　肥後考古学会

表2　遺物データ（1）

番号	種　別	器 種	出土区・層位	法　　量（cm）	特　　徴
1	須恵器	杯	旧河道	口径12.4・底径8.8・器高3.4	10Y灰6／1，煤痕
2	須恵器	杯	旧河道	口径15.0	SY灰5／1，ヘラケズリ，自然釉
3	須恵器	高台杯	旧河道	底径9.0	10Y灰5／1，刻書
4	土師器	杯	旧河道	口径12.3・底径6.6・器高3.7	7.5YR橙7／6，金雲母ふくむ
5	土師器	杯	旧河道	口径13.4・底径7.8・器高3.6	10YR浅黄橙8／4，胎土精良
6	土師器	杯	旧河道	口径12.4・底径9.6・器高3.1	7.5YR橙7／6，胎土やや粗い
7	土師器	杯	旧河道	口径12.8・底径7.6・器高3.5	7.5YR橙6／6，金雲母ふくむ
8	土師器	杯	旧河道	口径13.0・底径9.2・器高3.2	10YR浅黄橙6／8，胎土粗い
9	土師器	杯	旧河道	口径13.0・底径9.2・器高4.0	5YR橙6／8
10	土師器	杯	旧河道	口径11.2・底径9.0・器高3.8	10YR灰白8／2，器肉黒灰色
11	土師器	杯	旧河道	口径13.2・底径8.0・器高3.7	10YR明黄褐7／6，胎土粗い
12	土師器	杯	旧河道	口径14.2・底径8.8・器高3.2	5YR赤褐4／8，胎土精良
13	土師器	杯	旧河道	口径13.6・底径8.2・器高3.8	5YR橙7／8，胎土粗い
14	土師器	杯	旧河道	底径6.4	7.5YR浅黄橙8／4，刻書
15	土師器	杯か鉢	旧河道	口径14.6・底径8.4・器高5.4	7.5YR橙6／8，胎土やや粗い
16	土師器	高台杯	旧河道	底径7.4	7.5YRにぶい橙7／4，胎土やや粗い
17	土師器	皿	旧河道	口径26.2・底径11.6・器高2.5	7.5YR浅黄橙8／3，胎土粗く大粒
18	土師器	甕	旧河道	口径27.6	10YR浅黄褐8／3，胎土粗い
19	土師器	甕	旧河道	口径25.6	10YR浅黄橙8／4，胎土粗い
20	青磁	碗	A－14・Ⅳ		越州窯系青磁碗Ⅰ類，
21	土師器	杯	A－19・Ⅳ	口径11.4・底径6.8・器高3.0	5YR橙6／6，焼成良，金雲母ふくむ
22	土師器	杯	AB－8・Ⅳ	口径14.0・底径8.2・器高3.5	5YR明赤褐5／8，胎土細かい
23	土師器	杯	B－19・Ⅲ	口径13.4・底径8.6・器高4.0	7.5YR橙7／6，黒雲母多い
24	土師器	杯	B－19・Ⅳ	口径13.6・底径9.2・器高3.5	7.5YR橙6／5，胎土粗い
25	土師器	杯	AB－19・Ⅳ	口径13.8・底径8.0・器高3.2	5YR橙6／8，胎土粗い
26	土師器	杯	AB－18・Ⅳ	口径13.2・底径8.4・器高3.1	5YR橙6／8，胎土粗い
27	土師器	杯			5YR橙6／6，胎土やや粗い
28	土師器	杯	B－19・Ⅳ	口径14.0・底径7.8・器高5.0	7.5YR黄橙7／8，胎土粗い
29	須恵器	杯か鉢	B－19・Ⅳ	口径16.8・底径9.4・器高5.7	5YR灰6／1，胎土粗い
30	土師器	高台杯	B－19・Ⅳ	口径15.0・底径8.0・器高6.5	7.5YR明褐5／6，胎土やや粗い
31	土師器	高台杯	B－19・Ⅳ	底径9.2	2.5Y灰白8／2，胎土細かい
32	土師器	高台杯	AB－13・Ⅳ	底径9.2	7.5YR橙7／6，焼成甘い，刻書
33	土師器	杯	A－16・Ⅴ	底径9.2	10YR浅黄褐8／3，胎土粗い，刻書
34	土師器	皿か鉢	AB－14・Ⅳ	底径10.6	5YR橙6／6，胎土粗い
35	黒色A	椀	AB－19・Ⅴ	底径9.0	胎土やや粗く，石英・雲母ふくむ
36	黒色B	椀	AB－16・Ⅴ		胎土やや粗く，長石粒ふくむ
37	黒色B	椀	B－18・Ⅳ	口径15.0	胎土やや粗く，炭素の吸着が薄い
38	瓦器	椀	AB－19・Ⅴ	底径7.2	胎土やや粗く，器表風化
39	須恵器	甕	AB－17・Ⅳ	口径24.6	胎土細かい
40	土師器	甕か鉢	D－18・Ⅳ	口径22.6	胎土粗く，石英・長石・雲母多い
41	土師器	甕	B－19・Ⅳ	口径33.2	胎土粗く，石英・長石・雲母多い
42	土師器	甕	A－18・Ⅳ	口径25.6	胎土粗く，石英・長石・雲母多い
43	土師器	甕	AB－19・Ⅳ	口径27.0	胎土粗く，石英・長石・雲母多い
44	土師器	甕	B－18・Ⅳ	口径28.4	胎土粗く，石英・長石・雲母多い
45	土師器	甕	B－19・Ⅳ	口径26.0	胎土粗く，石英・長石・雲母多い
46	青磁	碗	AB－16・Ⅳ	底径5.8	胎土精良，高台内に砂付着
47	青磁	碗	SP－35	底径5.6	胎土精良，高台内露胎
48	青磁	碗		底径5.8	胎土やや粗く，高台内露胎
49	白磁	皿	B－16・Ⅴ	口径10.4・底径5.6・器高3.1	胎土精良，底部釉にむら
50	白磁	皿		底径4.8	胎土精良，底部露胎

表2　遺物データ（2）

番号	種　別	器 種	出土区・層位	法　　量（cm）	特　　徴
51	青花	皿	AB-8・Ⅳ		胎土精良，接地面露胎
52	青磁	碗		底径5.8	胎土細かく，底部露胎
53	黒釉陶器	碗	AB-15・Ⅲ		胎土細かく，体下部露胎
54	黒釉陶器	碗	AB-8・Ⅲ		胎土須恵質で細かく，体下部露胎
55	東播系須恵器	すり鉢	A-15・Ⅳ		5YR灰白7/1，胎土粗く，焼成甘い
56	東播系須恵器	すり鉢	A-15・Ⅳ		7.5YR灰6/1，胎土粗く，焼成甘い
57	備前系陶器	すり鉢	A-2・Ⅳ		2.5YRにぶい赤褐5/3，焼成堅緻
58	備前系陶器	すり鉢	A-2・Ⅳ		2.5YRにぶい赤褐5/3，焼成堅緻
59	常滑系陶器	甕	B-16・Ⅴ		外SY灰5/1，内5YR灰褐4/2，胎土粗い
60	瓦質土器	火鉢	AB-14・Ⅲ		7.5YRにぶい橙6/4，長石・金雲母粒
61	樺番城系須恵器	甕	C-2・Ⅴ		5Y灰6/1，石英・長石・雲母粒，焼成甘い
62	樺番城系須恵器	甕	C-2・Ⅱ		10YRにぶい黄褐6/3，石英・長石・雲母粒
63	樺番城系須恵器	甕	C-2・Ⅵ		5Y灰5/1，石英・長石・雲母粒，焼成甘い
64	陶器	小皿	AB-13・Ⅲ	口径9.4・底径5.0・器高2.2	胎土2.5YR明褐5/6，焼成良
65	陶器	小皿	AB-13・Ⅲ	口径7.8・底径2.0・器高2.5	胎土10R赤4/6，焼成良，胎土細かい
66	陶器	小皿		口径8.6・底径3.4・器高2.5	胎土2.5YR明褐5/6，焼成良，胎土細かい
67	陶器	小皿	AB-6・Ⅳ	底径3.0	胎土2.5YR暗赤灰3/1，焼成良，胎土細かい
68	土師器	小皿	AB-15・Ⅳ	口径8.4・底径6.6・器高1.7	7.5YR橙7/6，石英・長石・雲母，焼成甘い
69	土師器	小皿	B-16・Ⅳ	口径10.4・底径6.8・器高1.5	5YR橙7/6，石英・長石ふくむ
70	土師器	小皿	B-16・Ⅳ	口径7.8・底径6.6・器高1.7	5YR橙7/6，石英・長石大粒ふくむ
71	土師器	小皿	SP-25	口径7.2・底径5.2・器高2.5	5YR橙7/6，石英・長石，灯明皿転用
72	土師器	小皿	AB-19・Ⅳ	口径7.0・底径5.2・器高2.0	2.5YR明赤褐5/6，石英・長石・雲母ふくむ
73	土師器	小皿	SP-6	口径10.6・底径4.4・器高3.6	5YR橙6/8，胎土細かく，焼成良
74	滑石製品	仏像か	AB-12・Ⅲ		

Ⅳ　まとめ

今回の稗田原遺跡の調査では，旧石器時代から中世にいたる遺物が出土し，一部に遺構が確認された。遺物は，量的には古代が主体で，ついで中世が多く，旧石器時代と縄文時代は少ない。また，極めて少ないが，弥生時代と古墳時代と考えられる遺物も出土している（註１）。遺構については土坑とピットがあるが，遺物が出土したものは少なく，時期の不明なものが多い。出土した遺物をみる限りは中世後期のものが多く，一応この時期に定住的な生活が営まれたと推測される。

さらに，調査区南側において，旧河道が確認されたが，土石流によって埋没していたことが判明した。この土石流の堆積層から，奈良時代の土器がまとまって出土している。この層は，奈良時代以降の遺物を含まないが，層位出土の遺物には平安時代の遺物も認められるため(註２)，少なくとも平安時代のいずれかの時期に土石流が発生したものと考えられる。またこれらの遺物は，調査区南東側のさらに上流から流れてきたものであることが推測される。すなわち，本遺跡におけるこの時期の遺物は，もともと付近にあったものではない可能性が指摘できる。土器の中には文字が記されたものも認められ，地名や文献的な考証も必要となってきている。

出土量の多い古代について遺物から性格を推測すると，まず土師器の杯と甕が多いのが特徴である。このことは，時期的な点と機能的な点から注目される。北部九州においては，８世紀の後半に遺物に占める土師器の割合が須恵器を凌ぐとされるが（山本1996），本遺跡の土師器も簡略化されたつくりなどから，同じ時期に含まれるのではではないかと考えられる。また甕の多さについては，煮沸という機能から食物の生産や加工が行われたと報告された例もある（宮崎1990）。今後，本遺跡とその上流について古記録にもとずいた生産性の考証などが必要となろう。また，島原半島で初めて出土が確認された越州窯系青磁は，奢侈品として有力者の存在が推測される資料である。

中世については，国内外からの多彩な搬入品が注目される。輸入陶磁器は，中国産の青磁が主体を占め，白磁・青花がつづき，李朝産もみられる。国産のものでは，瀬戸・常滑・備前などの陶器のほか，瓦質土器や土師器がある。これらは，中世後期の遺物としては城館などでみられるものである。この時期の本遺跡については，遺構の性格が不明な以上，はっきりとはいえないが，ある程度の有力者の館かその周辺にあたると推測されよう。なお，出土遺物の中に肥後の樺番城窯系と考えられる甕が出土しているが，対岸の肥後との流通を考える上で重要である。

以上，稗田原遺跡の調査を総括したが，本遺跡は複数の時代にまたがっており，場所により主体となる時代が異なるという複雑な遺跡であるといえる。その理由としては，雲仙岳の火山活動やそれに伴う土石流などの災害が関係していることが，徐々に明らかになりつつある。今後は周辺の遺跡も含めて，歴史的な推移を探っていく必要があろう。

〔註〕

註１　弥生土器は，須玖式土器の小片が出土している。

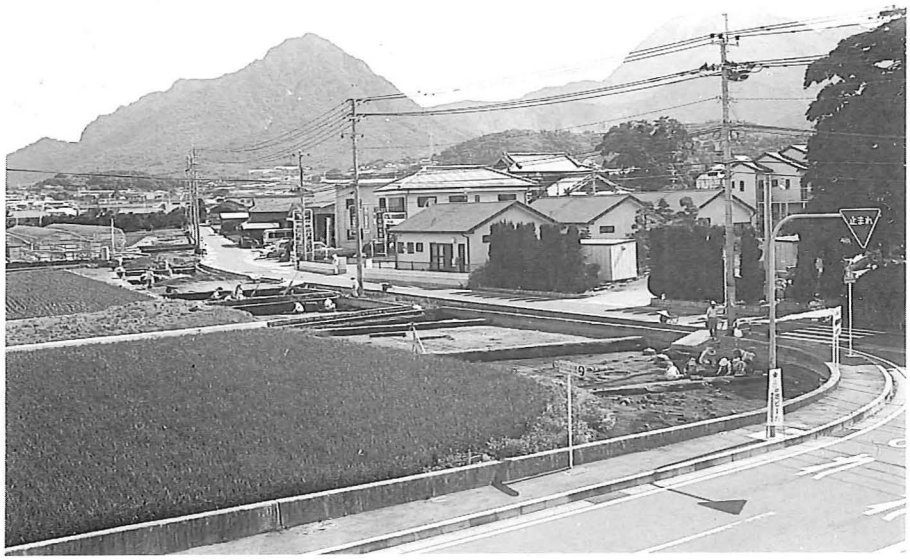
註２　旧河道が埋没した後に削平されたと考えられる。

〔引用・参考文献〕

山本信夫1996「北部九州の土器」『日本土器辞典』雄山閣

宮崎貴夫1990 勝本町文化財調査報告書第８集『串山ミルメ浦遺跡』勝本町教育委員会

図　　版

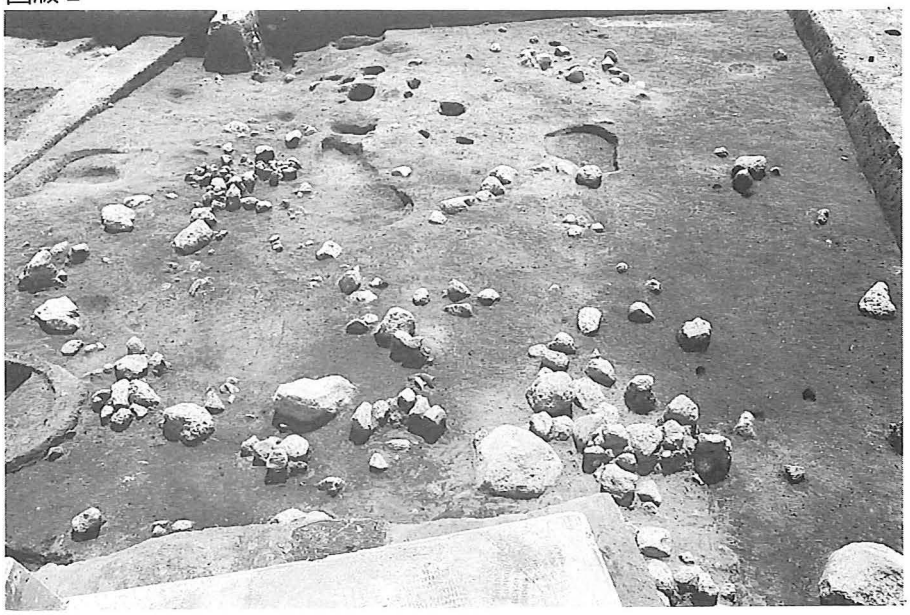


調査区遠景

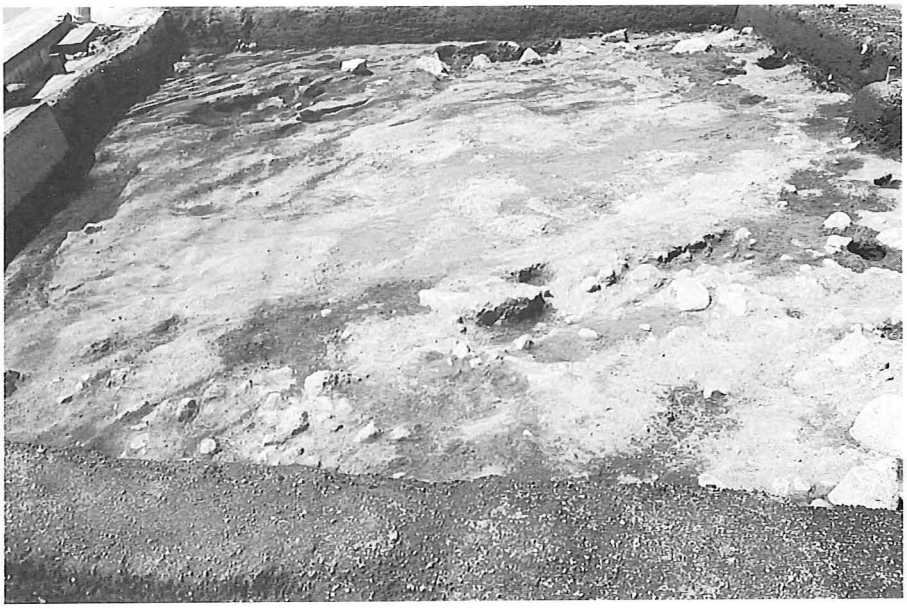
作業風景

実測風景

図版２



ＣＤ ２
アカホヤ下



Ｂ６
南から

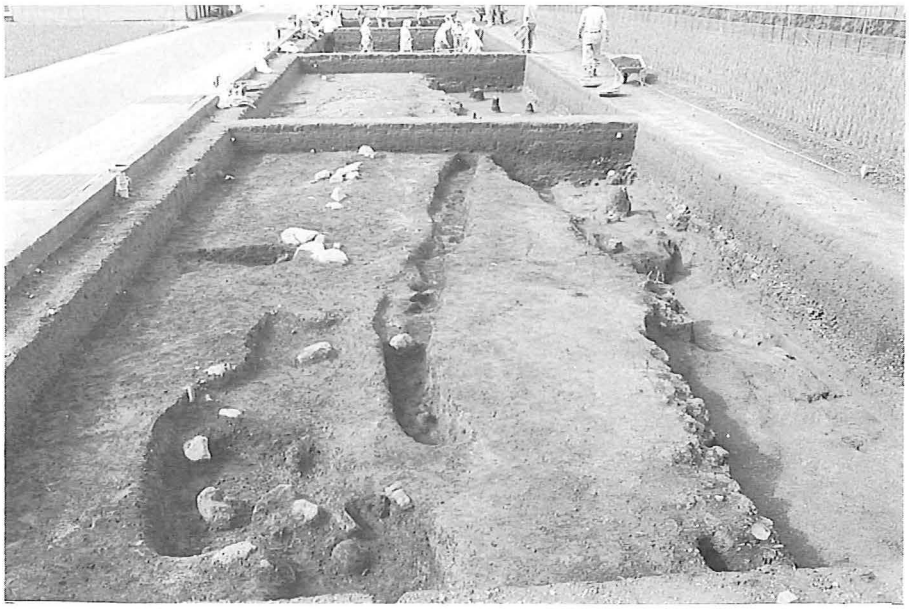
Ｂ７
南から

ＡＢ12
旧河道
北から

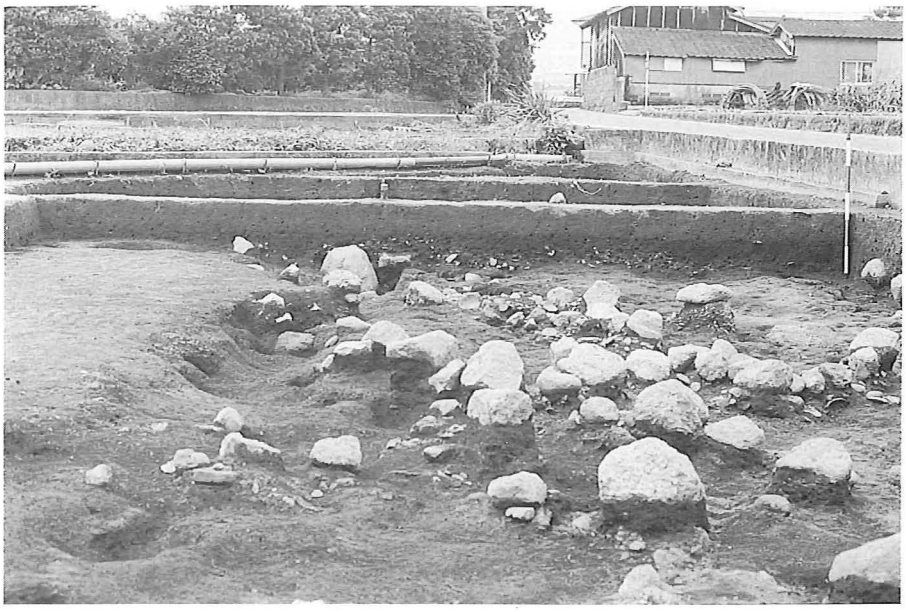
ＡＢ12
旧河道
南から

ＡＢ12
南壁セクション

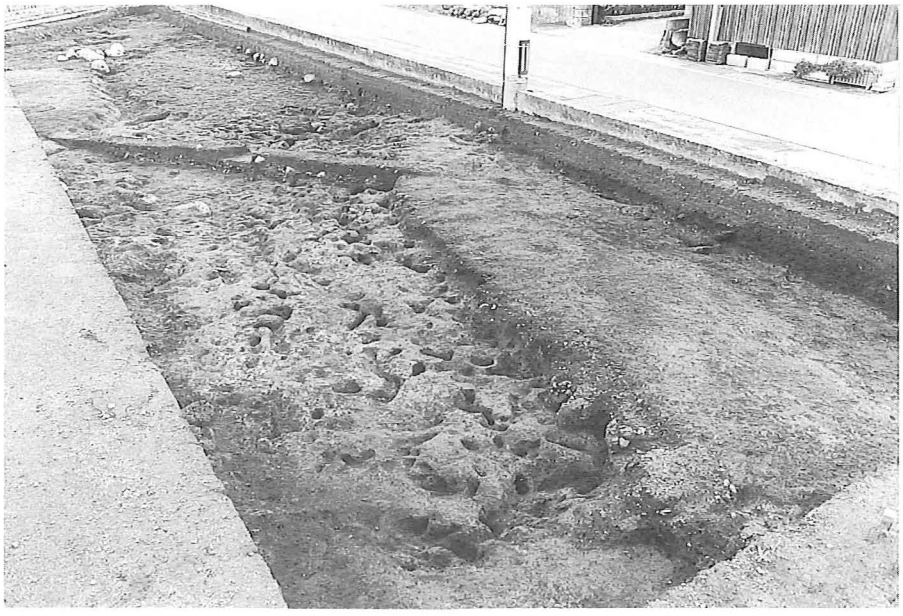
図版４



Ｂ16
206号溝状遺構
南から



ＡＢ18
南壁セクション



ＡＢ18
旧河道
北から

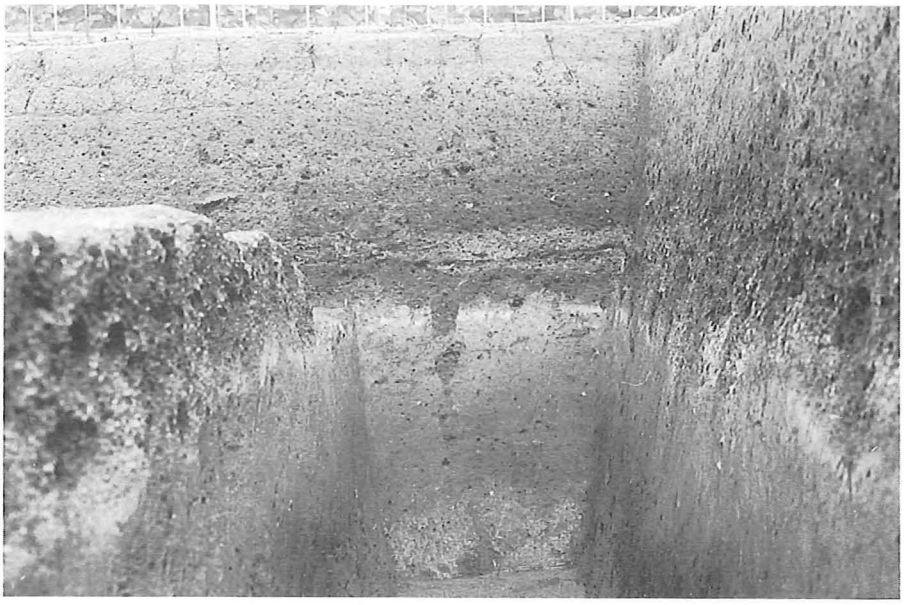
ＡＢ14～19
旧河道全景
北から

ＡＢ16～17
旧河道
北から

ＡＢ７（ＴＰ２）
南壁セクション

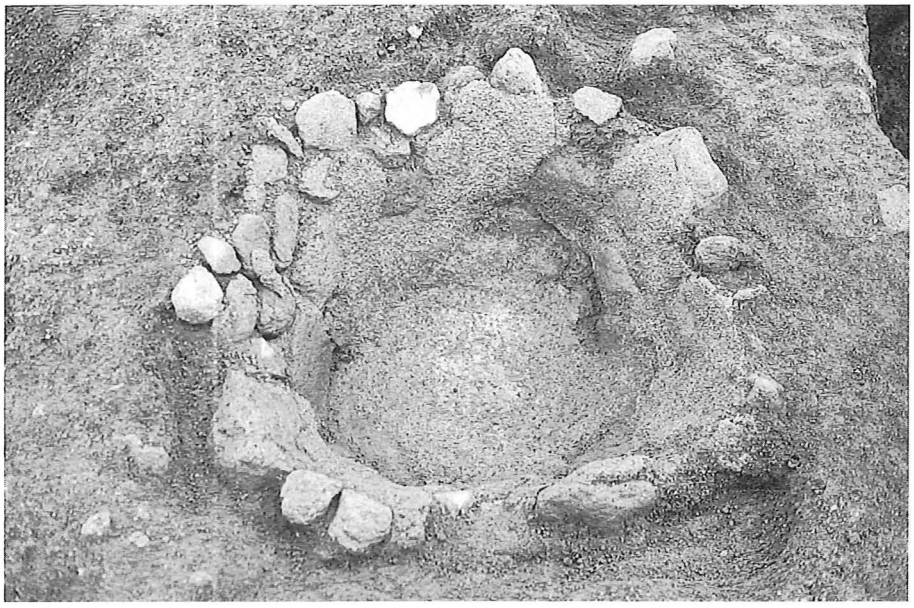
図版６

A11
南壁セクション



ＡＢ13
南側トレンチ
西から

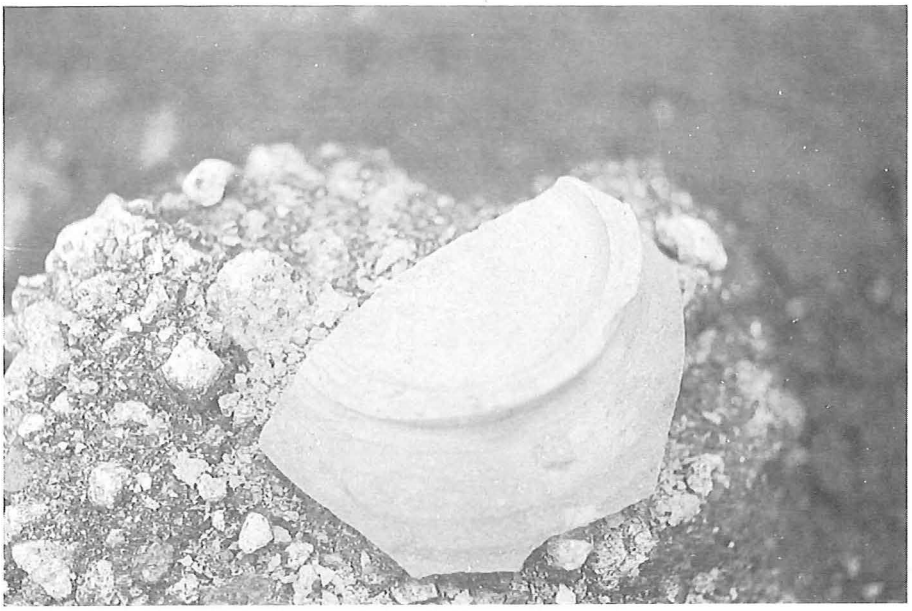
ＡＢ13
南側トレンチ
北から



Ｂ８　95号土坑

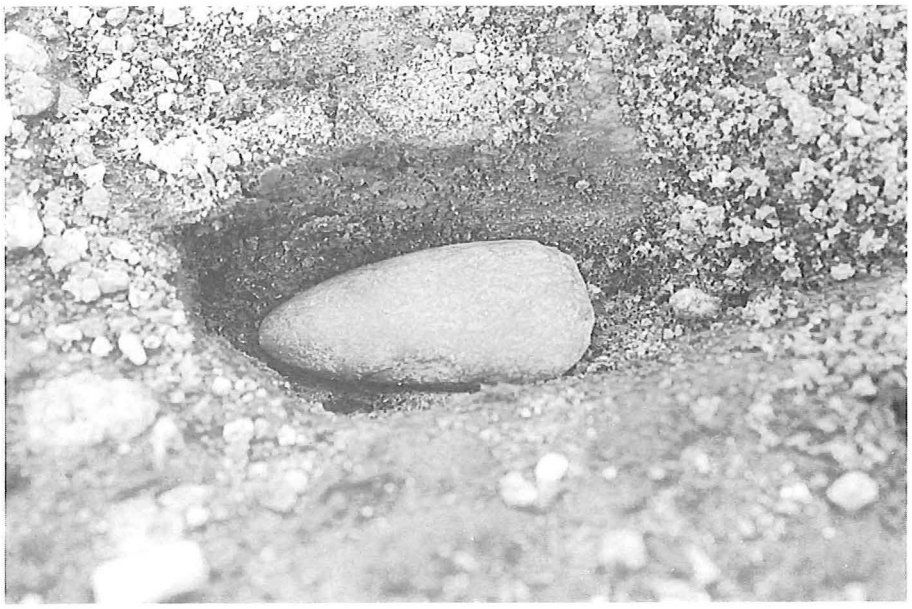
ＡＢ14　７層　306号土坑

図版８



ＡＢ14
Ｐ38

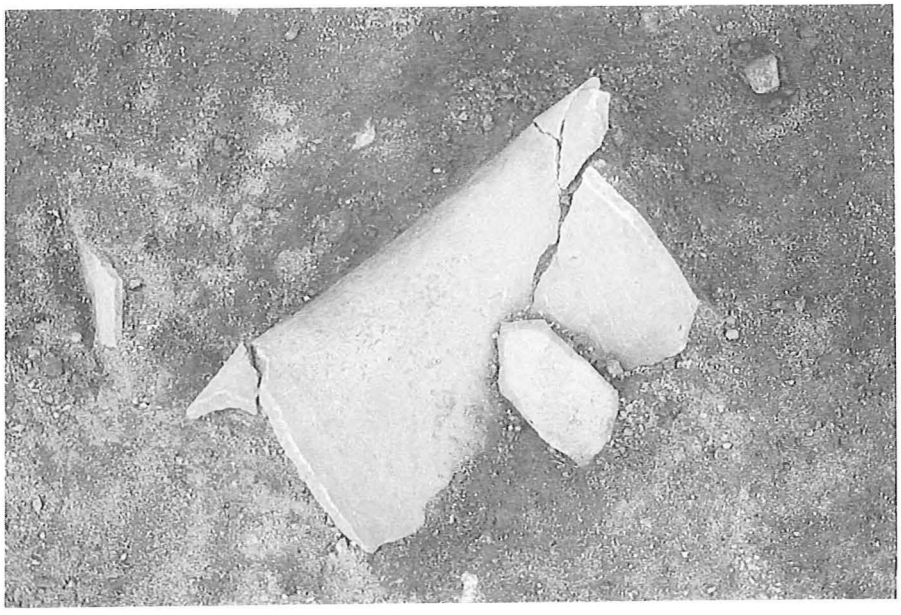
ＡＢ16
中世溝内



ＡＢ18
旧河道

ＡＢ18
旧河道

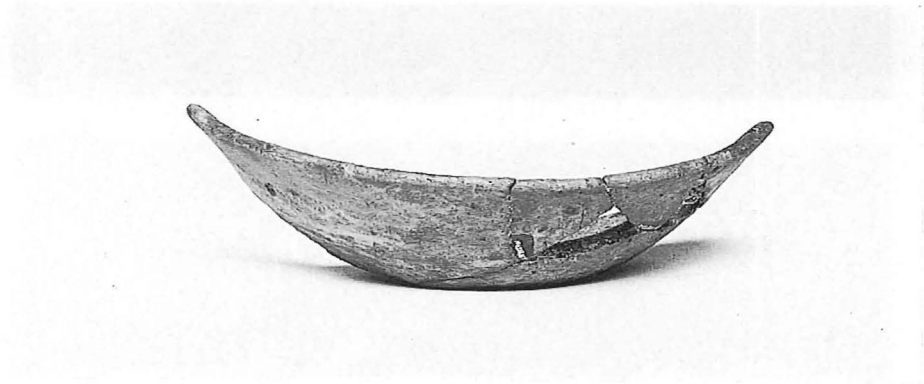
ＡＢ18
旧河道内
遺物出土状況



Ｂ19
５層

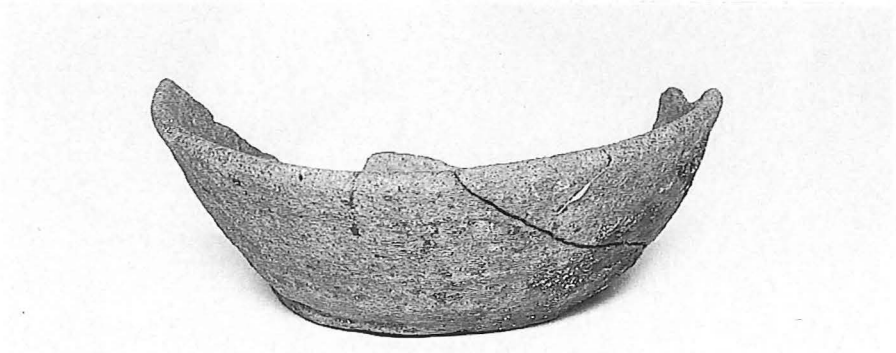
図版10

須恵器 1

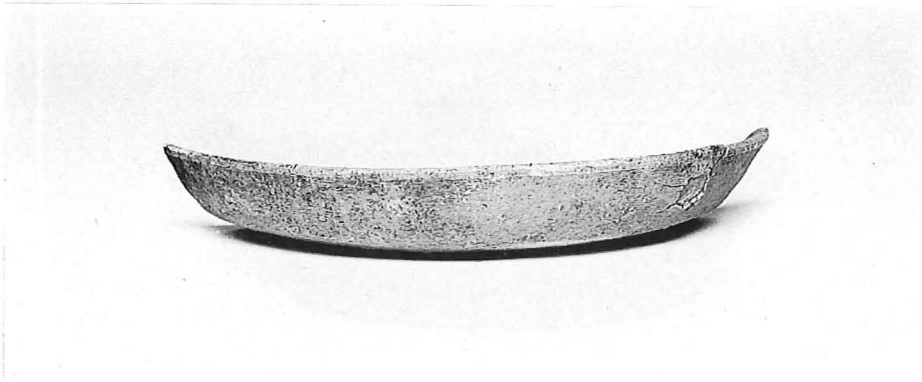


土師器 7

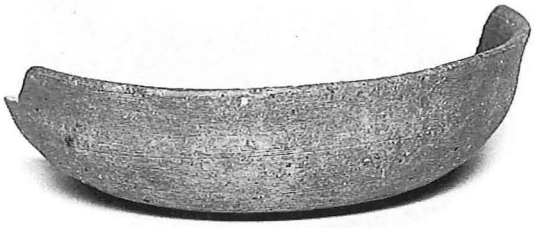
土師器13



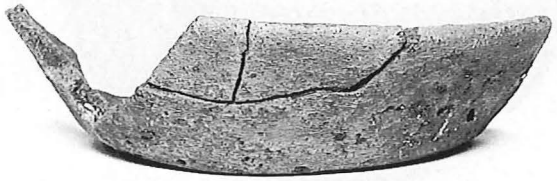
土師器15



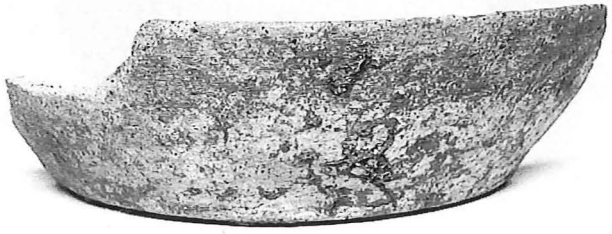
土師器17



土師器21



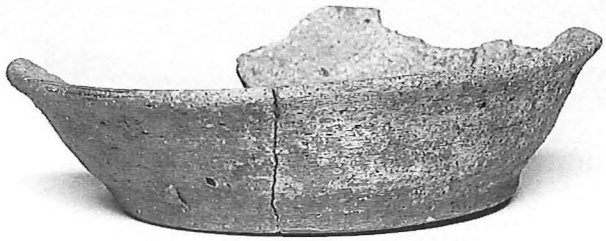
土師器22



土師器23

図版12

土師器24

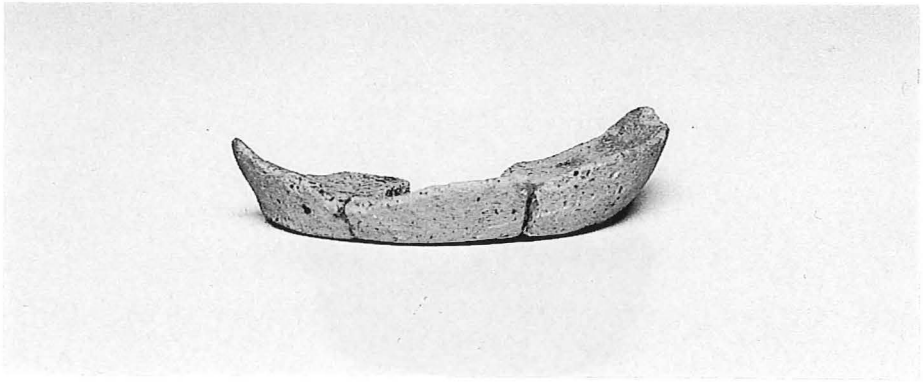


土師器27

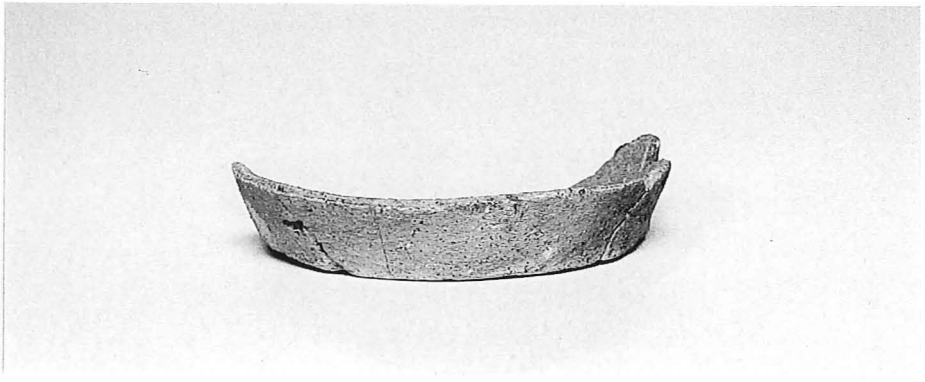
土師器28

須恵器29

土師器30



土師器68

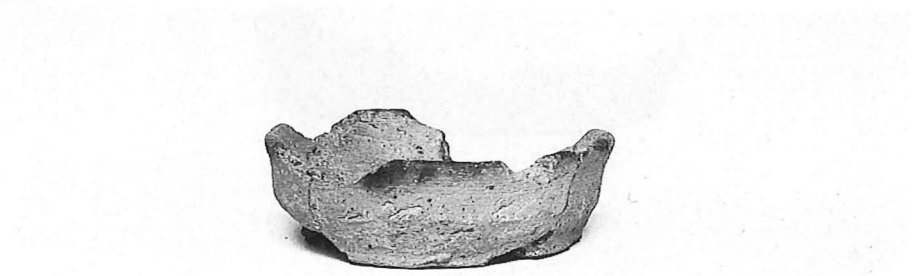


土師器69

図版14

土師器70

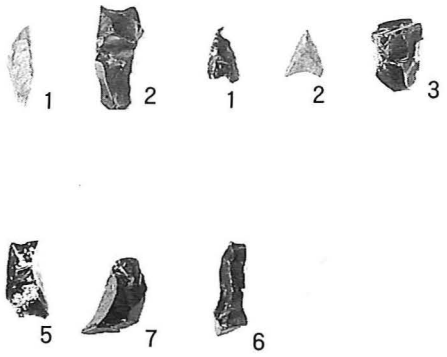
土師器71



土師器72

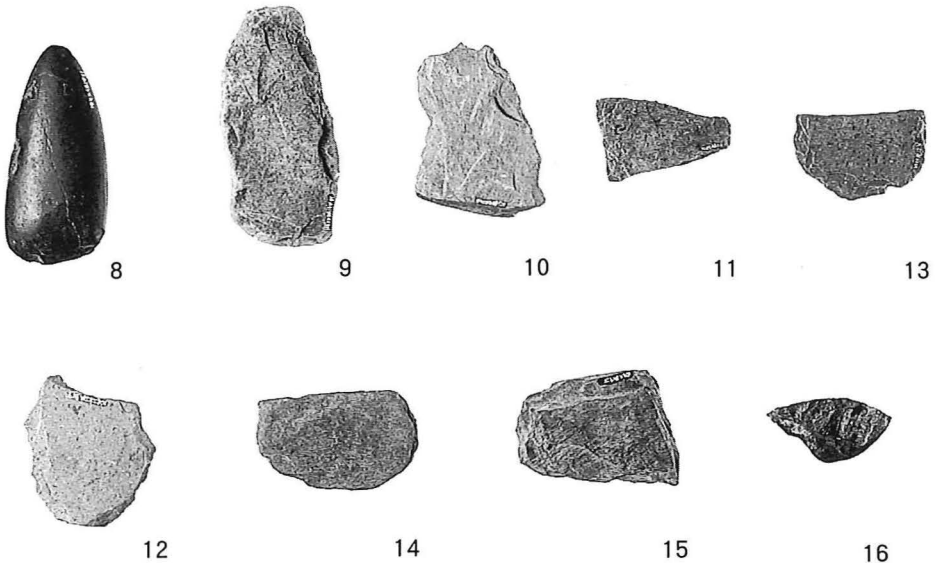
土師器73

第10図　　第12図

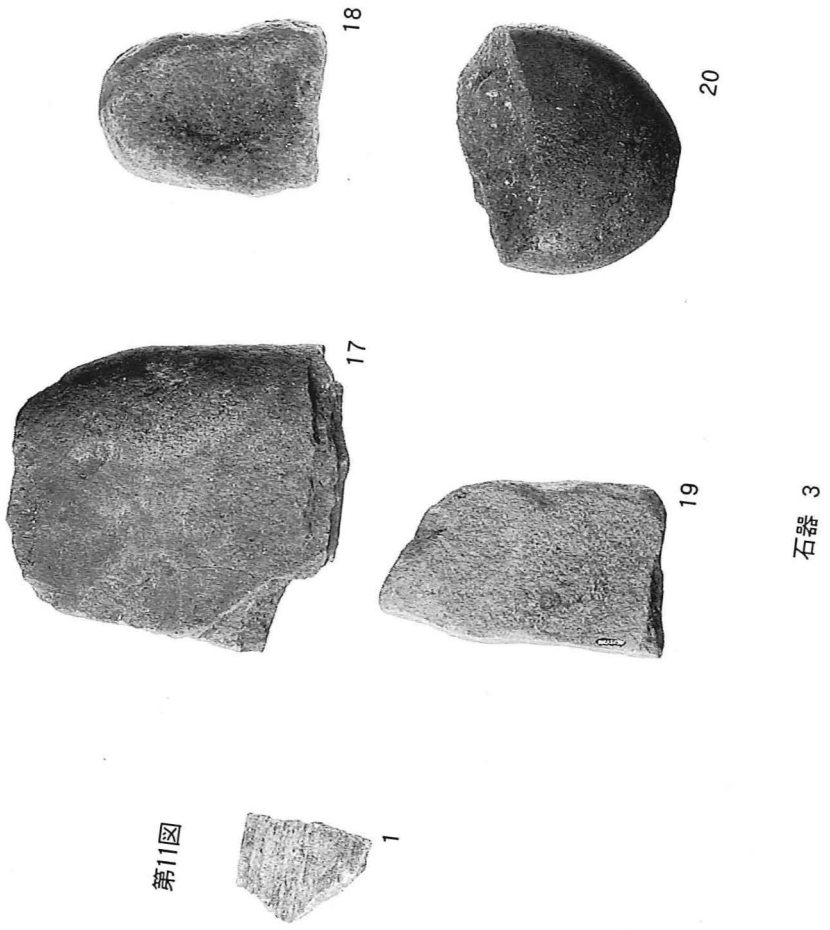


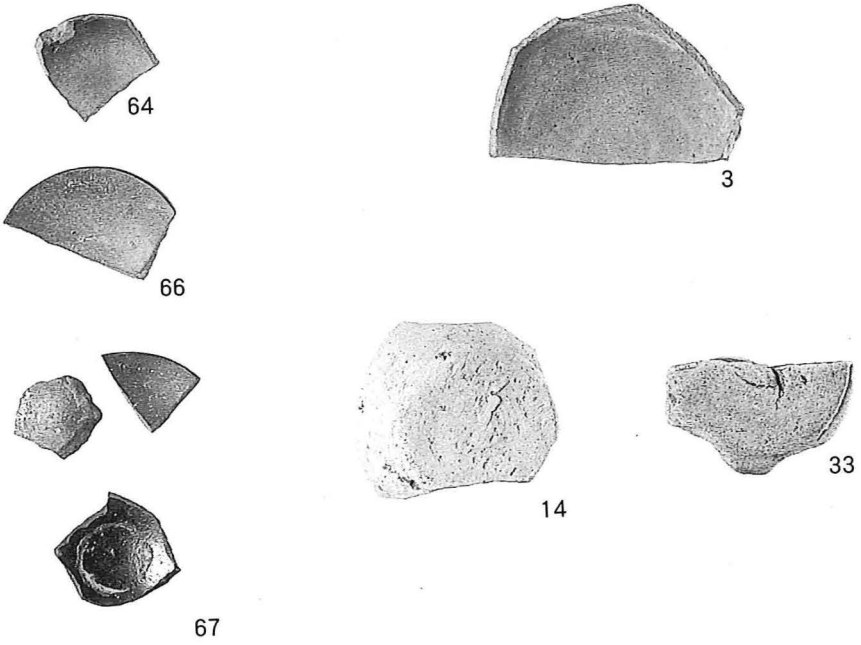
石器 1

第13図

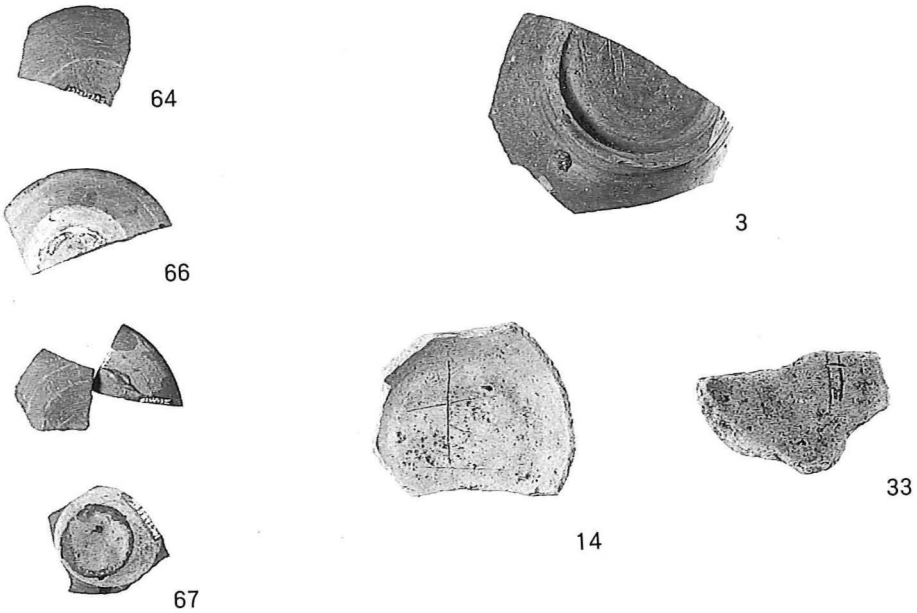


石器 2


18
20
17
19
第11図
1
石器 3

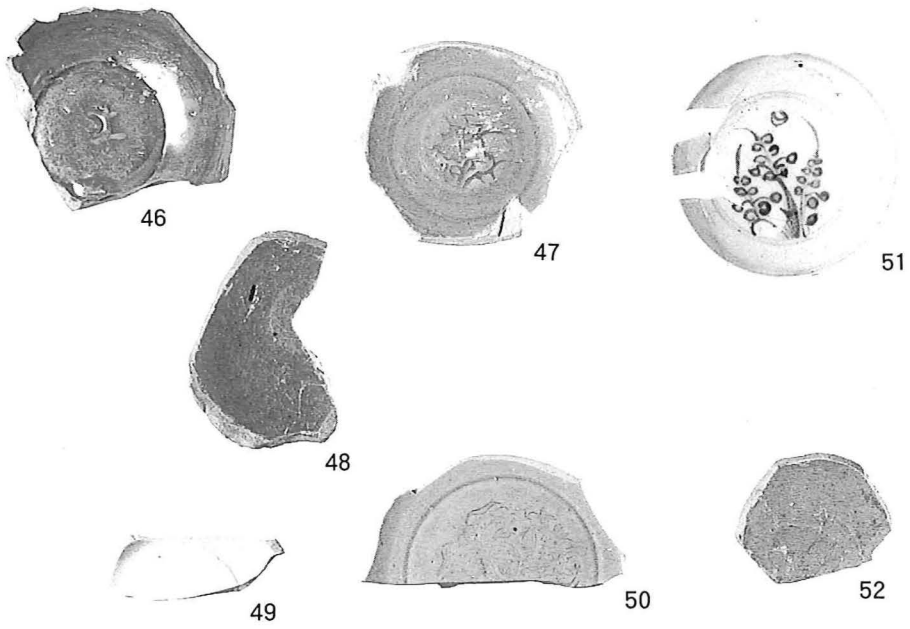


陶器・刻書土器

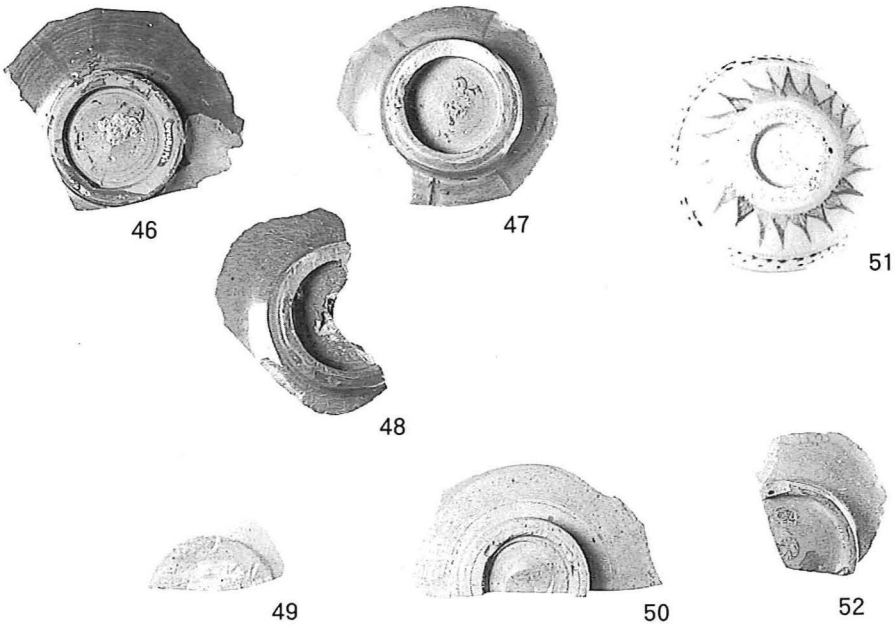


同　（裏）

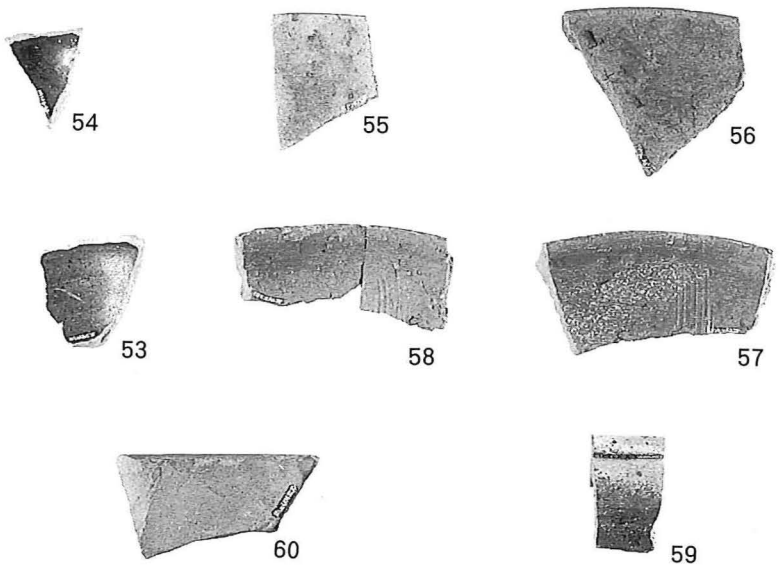
図版18



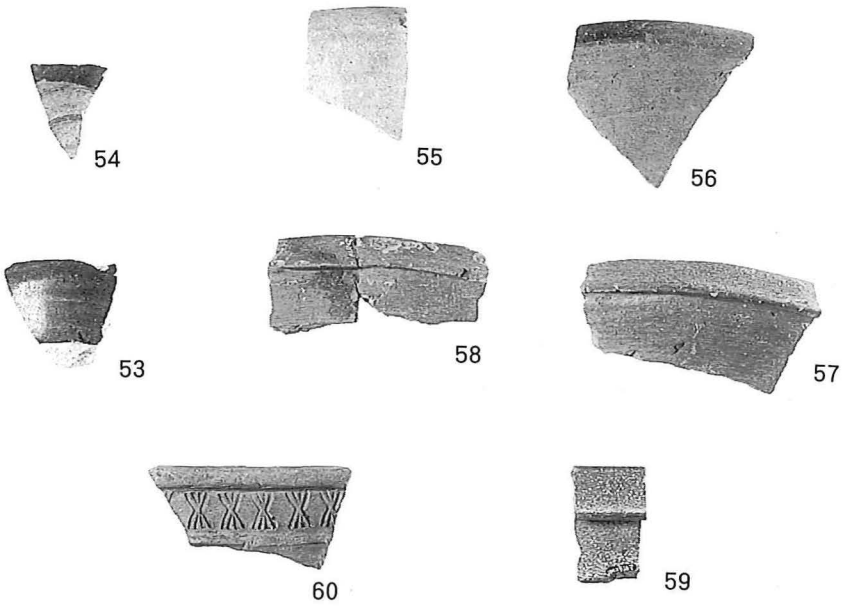
輸入陶磁器（内）



同　　（外）

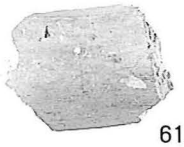


国産陶磁器（内）

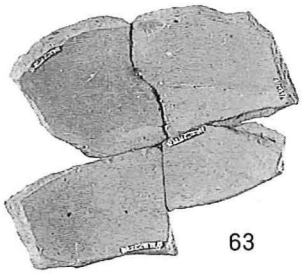


同　（外）

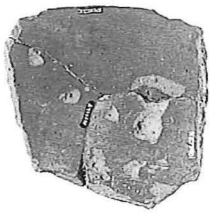
図版20



61



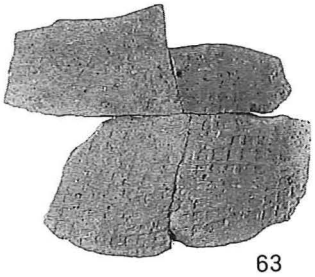
63



62

中世須恵器（内）

61



63

62

同　　（外）

報告書抄録

ふりがな	ひえたばるいせき
書名	稗田原遺跡
副書名	
巻次	Ⅲ
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書
シリーズ番号	第１５２集
編著者名	川口　洋平・宇土　靖之・尾上　博一
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒859-8570　長崎県長崎市江戸町2-13
発行年月日	西暦　１９９９年　３月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
稗田原遺跡 （ひえたばるいせき）	島原市稗田町 （しまばらしひえたまち）	03	92-74	32° 48′ 24″	130° 21′ 10″	19971201 19971205 19980513 19980710	24㎡ 1,340㎡	道路拡幅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
稗田原遺跡	散布地 生活跡	古代 中世	土坑	土師器・須恵器 貿易陶磁器 国産陶磁器	

長崎県文化財調査報告書　第152集

稗田原遺跡 Ⅲ

平成11年3月31日

発　　行　長崎県教育委員会
長崎市江戸町2-13

印　　刷　㈱クイックプリント
長崎市樺島町8番12号